

第五章 蚕都かもじま

第一節 養蚕、製糸学習報告

1、養蚕の歴史

かもじまでの養蚕の歴史は古い。「古事記」「日本書記」の時代へさかのぼらなければならぬ。伝説の呉島郷くれしまごに呉の国から呉服部くれはとりべ（織物技術者）がきていたとすれば、すでに養蚕が行われていたことになる。和銅七年（七一一年）錦織技術者が阿波へもきたことが伝えられ、仁和三年（八八七年）には阿波より朝廷に貢上した絹が粗悪だったので正倉院の絹を見本にして織るように命ぜられている。（正倉院古文書）そして、その後の延喜五年（九〇五年）頃には、絹織物、絹糸の屈指の産地とまでに成長している。この外に、木屋平村（当時は麻植郡）の三木家古文書のなかにも、絹糸、桑の年貢のことが細かく記されている。

藩政時代となって、家政も最初は養蚕の保護につとめたが、藍作が優先し、畑地を奪ったため、わずかに山間の一部でつないでいただけであった。しかし明治になって、藍



蚕都鴨島の全景

の代替作物として養蚕は息を吹きかえしてきた。

2、製糸業の勃興（明治の年表）

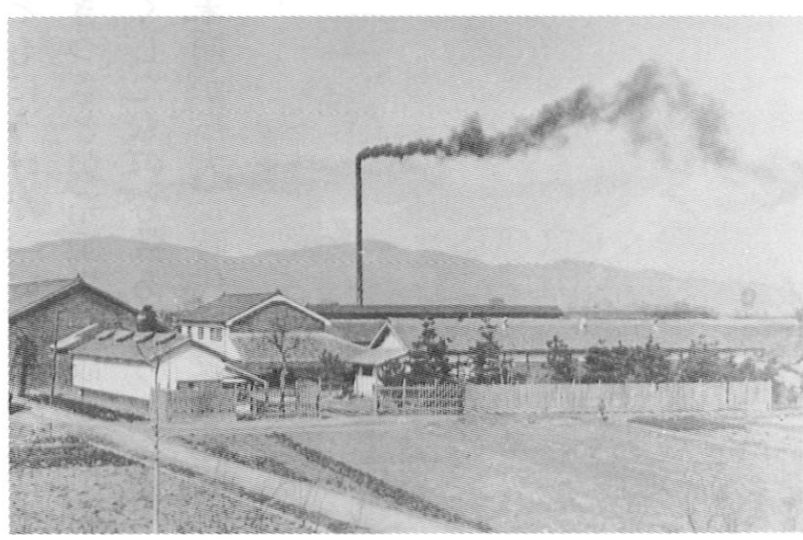
明治 初年	<ul style="list-style-type: none"> 藩政庁に栽桑料設立、丹波国より真名井純一派遣され養蚕の指導にあたる。 官有地、二〇〇ヘクタールの桑園をつくる。 徳島西の丸に桑田繁殖場をつくる。 旧藩邸を蚕室、製糸場、織殿と改造し、旧士族向けの産業育成とする。 蚕種製造養蚕場で製造した蚕種を「剣山」「大鳴門」などと名づける。 イタリア、フランスへ輸出する。 暴落のため輸出とまる。 官有地桑園民有地となる。 田宮の農事試験場に採苗所設置。 川田達太郎採苗を無料配布。
明治 十九年	<ul style="list-style-type: none"> 県立蚕糸伝習所を設置し二十一年に五馬力の製糸機三〇釜を設置する。 牛島村、日野安太郎製糸業を創業。 猪城製糸（川田達太郎）三〇カマ創業。 徳島製糸（新開貢）七〇カマ創業。 糸価暴落のため、いずれも廃業。 阿波、麻植両郡の阿波製糸（一〇〇カマ）川島で創業。 阿波製糸敷地村須見千次郎に移るが数年で廃業。 佐渡製糸（二〇〇カマ）創業。 県蚕種製造所設置。 筒井製糸創業。
明治 二十三年	
明治 二十九年	
明治 三十四年	
明治 四十一年	
明治 四十二年	
明治 四十三年	
明治 十三年	<ul style="list-style-type: none"> この時期は、比較的規模の大きい製糸工

養蚕業のことは桑の作付面積によって、あとをたどることができる。明治三〇年で一〇〇〇ヘクタールに達し、その後の十年で急激に四〇〇〇ヘクタールに達している。前者を準備期とすると後者は発展期といえる。大正から昭和四年が全盛期で、ピークは一〇〇二四〇ヘクタールを記録している。しかし、昭和五年より糸価は大恐慌のありをうけ漸次衰退していく。このように藍に代った養蚕は、

<p>明治四十三年</p>	<p>場が創業。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小口組（四三四カマ）・片倉・四国・日之出・林製糸は各一〇〇カマで創業。 <p>・このほか麻植、東生社、福田、柿島、阿</p>
<p>大正 〃 十一年</p> <p>九年</p>	<p>波共同の各製糸が創業。 県内約四〇〇の製糸工場が誕生。 ・鴨島に蚕病予防事務所設置する。 ・鴨島に蚕病予防事務所設置。 (徳島県の歴史より)</p>



佐渡製糸所



笠井製糸所



後藤田製糸兼蚕種製造所



島勝蚕種製造所



殖蚕館 鈴木蚕種製造所

適作地に植えられた藍とちがって、技術の難しさと生糸市況の波をまともにもうけた「いばらの道」であった。藍で財を貯え込んでいた藍商たちは、養蚕が盛んになると、つぎつぎと製糸工場を設立していったが、相ついで倒れた。製糸業に手を出したがために、家屋敷まで失くしたものも数ある。

比較的操業の長い工場は明治四十一年以降創業されたもので、明治末期から大正時代に設立された工場は県内では、約四〇工場を数えられた。

4、工場参観の記

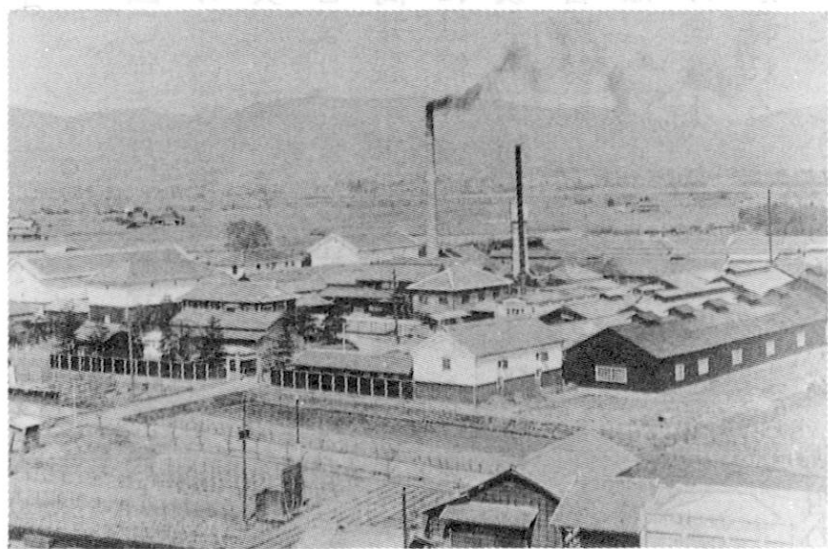
昭和四年十二月十一日、私たち一同は先生につれられて、関西の模範工場といわれる筒井製糸所を参観した。

まず案内の人に導かれて乾燥室へ入った。ここには六台の大きな乾燥機がすえつけられて、何でも一日に二万貫余りの繭が乾燥されるそうだ。繭をのせた網が回転するにつれて、水蒸気の熱で乾燥される。ここで乾燥されたものは倉庫へ貯繭しておくのだそうだ。

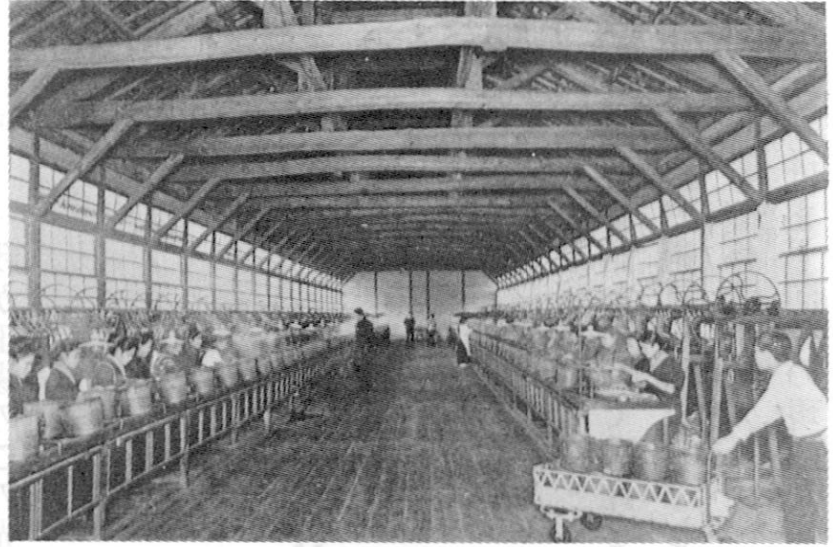
次は撰繭場で、倉庫から運んできた繭を、数名の工女さんが撰繭台にのせて、面白いほど敏速に撰繭して行く。撰繭されたものは更に煮繭場へ送られる。

煮繭場では白い湯気がもうもうと立ちこめて、室内は冬でも暖かい。機械の運転につれて、網籠あみかごにはいった繭が水蒸気や熱湯の中を通過する。こうして煮繭されたものは、小さい桶おけに入れられて繰糸場へ送られていく。

繰糸場では、何百台とも知れない機械が両側にならんで、工女さん達が一生懸命に糸をとっている。とれた糸はだんだん後の枠に巻き取られる。数知れない白い枠が音もなく、ひらひらと廻るのは実に壯観である。



筒井製糸所



生糸製造の一部

糸がとれるにつれて、釜の中の繭が減ってくるので、数人の少年が煮繭場から、繭を運んできては空になった桶おけを向うへ運び去っている。後に残った蛹まごは一しよに集めて、バケツに入れてどこかへ運んでいく。この蛹からは油をしぼり、その粕かすは肥料になるのだそう。次は再繰場である。こゝでは繰糸場から送り出された小枠の糸を、更に大枠に巻きかえている。

次の室ではセリプレン検査をしている。この検査では繰った糸の太・細・節やむらのあるなしを調べ、その成績によって輸向と内地向のものに区別される。

次は束装室そくそうしつであつて、ここでは再繰室から運ばれたものを、「捻ぢねぢ」で一捻とし、それを三〇合あわせて一括とし商標をつける。これが出荷される生糸が出来あがつたわけである。

その他、寄宿舎から食堂、動力室、ボイラー室等を見せてもらった。いずれも規模が大きく設備のいきとどいているのに驚かされた。

更に従業員の精神修養、技能奨励、健康、衛生の向上にも注意がはられていて、労使協調の花も咲き、能率もあがるのだ。模範工場ともなり得るのだ。

要するに工場主の清らかな性格と、秀でた経営手腕が、わが町の誇りとするこの工場をつくりあげたのだ。お話によると、本工場は明治四十三年の創業で、脇町、毛田山、国府に分工場が設置され、従業員約八〇〇名、年々約十五万トンの生糸を生産して、アメリカへ直輸出されているとのことである。

私共はこの工場が益々発展されるように祈って帰途についた。

工場歌

筒井製糸所

一、神代の昔、麻植えし

ゆかりの土地ぞ みてぐらと

神もめづらん 御宝と

人もたたえん 絹糸や

外国人の仰ぎみる

我が工場のこの光

二、かざらぬ清き誠心は

吉野の水を鏡とし

なりはひ高き 勲は

剣の山を心とし

いざ共に 励まなん

我が天職をつくさなん

第二節 筒井製糸の全貌ぜんぼう

1、はじめに

筒井製糸を語らずして鴨島を語ることができない。同社は、創業以来あらゆる面で町発展に貢献してきたと言って過言ではない。しかし、これまでの資料ではあまりにも紹介されていないことが、学習会員の中にも関係者が数人いて、指摘された。

私たちはまず同社の現会長の筒井康二、社長の筒井直典、同社常務の川真田覚氏に一日をさいてもら

い、工場内を案内していただいた。やはり、ここにはかつての「蚕都鴨島」を忍ばせる郷愁が感じられた。明治生れの方なら尚更であろう。

幸にして私たちは当時の蚕糸高等学校において、教科書として筒井製糸所のことを著し、教壇に立たれていた鴻巣久先生（こうすく）の『能率増進と筒井製糸』の本をお借りすることができた。何んでも国立図書館に一冊しかないものだそうだ。驚いたことに鴨島のこと本場の群馬で詳しく指導されていたのだ。そしてこの本は、当時の工場長として筒井氏に招かれていた宮城長策氏によるところが大であった。本節が成立にいたるのも両氏の記のおかげである。

2、筒井製糸の沿革と背景

—— 創業から大正まで ——

筒井製糸は、明治四十三年一月の創業であった。当時は「浮繰（うきぐり）」の四〇釜であった。この筒井製糸の生れた背景を知るために、先述の製糸業の流れは見逃せない。本県の製糸は古い昔より始まっていること。奈良時代には全国でも上位な国であったこと。藩政時代は藍作重点政策をとったため、わずかに山間部において命脈を保っていたこと。それが明治の世となつてから、茂昭侯が士族のために、養蚕製糸を取入れ、種々の試験及施設を設立したこと。

明治十九年に県立蚕糸伝習所を設置し、同二十一年に三〇釜を据付けたのがきっかけとなっている。はじめのうちは（明治五・六年頃）東北地方の座繰法が移入され、産額も二〇〇貫位のものであったが、明治二十七年頃には足踏が普及していた。

年 代	機械工場	釜数	生産高 貫	1釜当 り 梱	県全体釜数	県全体生産高 貫
明治40年	1	196	3,691	2.09	不 明	10,036
43年	5	984	11,528	1.30	不 明	18,430
大正2年	20	1,112	22,432	2.24	不 明	30,027
5年	21	2,450	31,310	1.42	5,765	42,780
8年	48	2,777	60,170	2.40	5,573	69,480
11年	44	2,701	61,657	2.54	4,494	69,089

明治大正の製糸業の状況

機械製糸になると、明治三十四年、阿波製糸株式会社が、県の補助を得て創業したのがそもその始まりであった。

しかし、同四十年までは機械製糸はこの一工場にすぎない。筒井製糸が創業した当初は、県下には四工場、七三〇釜であった。生産額にしても同三十八年には県全体で五〇〇〇貫、同四十二年には一二〇〇〇貫を数えるにすぎなかった。県としてもあらゆる方面に奨励指導したにもかかわらず、工場としての発達は思うように伸びなかった。

このような環境に生れた筒井製糸は、水星の如く創立され、頭角を現わした。もちろん筒井直太郎氏の先見の明と努力によるものであったが、筒井氏は創業に先だち、山形県の「沈繰法」の実施に向けて研究に入ると同時に、製糸業には繭品質の改良、職工の教育から優良生糸製品を創りだすものと確信をもっていたと思われる。従って最初から七釜の工女養成所を特設し、大正二年に六〇釜としたときも、工女養成所を七釜増設している。そして同十二年八月には二十六釜増設し、一〇四釜となったが、常に増釜に対して、着実な技術向上を計ってあたっている。

「揚返」は、当初は三十二窓であつて、その後、四十四年五月に十八窓を増設、大正五年には鬼綾式に改造し、大正七年に五十六窓を増設、

大正十二年一〇六窓とした。

次に「繰糸法」を見ると、創業当初の浮繰から大正二年に「半沈兼業法」を採用した。大正五年からは「煮繭分業沈繰法」に改め、同十一年六月に「索緒分業」の先鞭を付けた。

繰糸条数は、当初の三条繰の小枠二尺二寸を用い、大正五年十二月には工場の半数を四条繰に改め、大正六年五月に全てを四条繰とした。大正十年には五条繰に入り、八月から索緒分業六条繰糸鍋の研究に入り、同十二年筒井式六条の分業式と改められた。

小枠の回転数も当初は、四七〇〜五〇〇回であったが、四条繰となつてからは四五〇と、五条繰では三五〇から四〇〇回とした。六条分業式では三〇〇回を中心とした。

年次	釜数	揚返窓数	生産額 貫	1釜当り 生産額	同 梱 数
明治43	44	32	727,053	16,535	183
44	51	50	1,038,579	20,364	226
45	51	50	1,476,079		
大正元				28,961	321
2	71	〃	2,088,410	29,414	327
3	74	〃	2,372,440	32,006	353
4	〃	〃	2,434,640	32,901	365
5	〃	〃	2,586,350	34,951	388
6	〃	〃	3,055,640	41,292	458
7	〃	106	3,531,040	47,722	530
8	〃	〃	4,819,680	65,131	723
9	〃	〃	4,979,300	67,288	747
10	〃	〃	6,304,000	85,189	946
11	78	〃	7,216,000	91,342	1,015
12	104	〃	10,263,000	99,867	1,109

筒井製糸創業以来の生産額 (大正12年まで)

工場の窓も大正十一年には全部スリガラス製で、六尺窓の上段に、二尺の回転窓を設けて、採光と換気に細心を注いでいる。煮繭機は、大正五年に沈繰法を採用する際に、中原式二台を据付け、大正九年に矢島式進行機、大正十二年に宮崎式の据付けをしている。

生繭乾燥機は、明治四十三年に火熱式一棟を造り、大正十一年に至って汽熱式乾燥場を新設、千葉式自動乾繭機を増設した。その他、機械等の改良もめざましく、生産性を高め、事業の進展につとめている。創業以来の生産額、一釜当りの生産額の増加をみても、画期的なものであったことがわかる。

前記表のとおり、筒井製糸は大正十二年の生産性において、全国有数の工場となっていた。この工場の能率を高めたのは、工場員の資質に大きく左右されるが、教育方法については別項にゆずる。

3、工場配置図と設備

大正末期までは配置図のとおりであるが、寄宿舎の三階には展望台を設け、休憩中には吉野川沿岸をながめられ、裁縫室、髪結室も完備され、中庭は日本庭園でくつろぐことができるよう配慮されていた。筒井氏は工員の厚生面に相当の神経を費していたことがうかがえる。

※ 女子寮は佐渡製糸所の建物を購入したもの

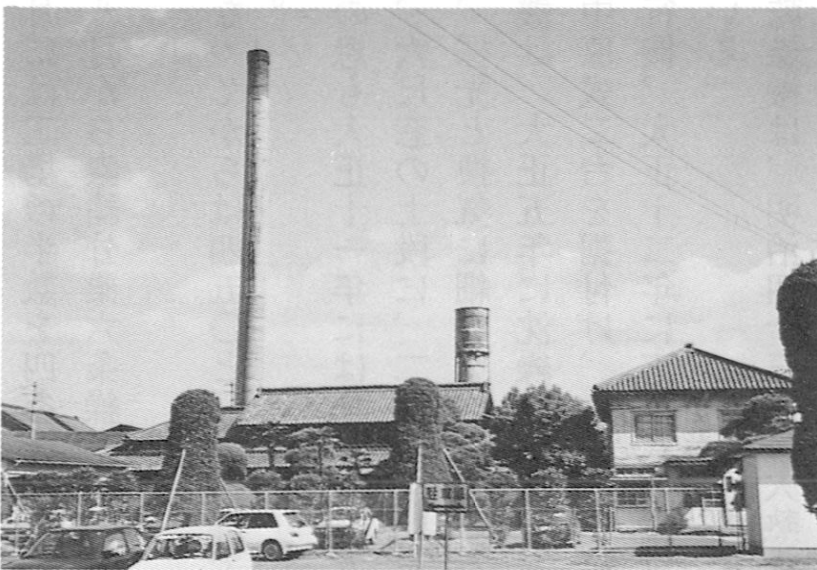
※ 当時の工場設備

一、繰糸工場、一〇四釜、

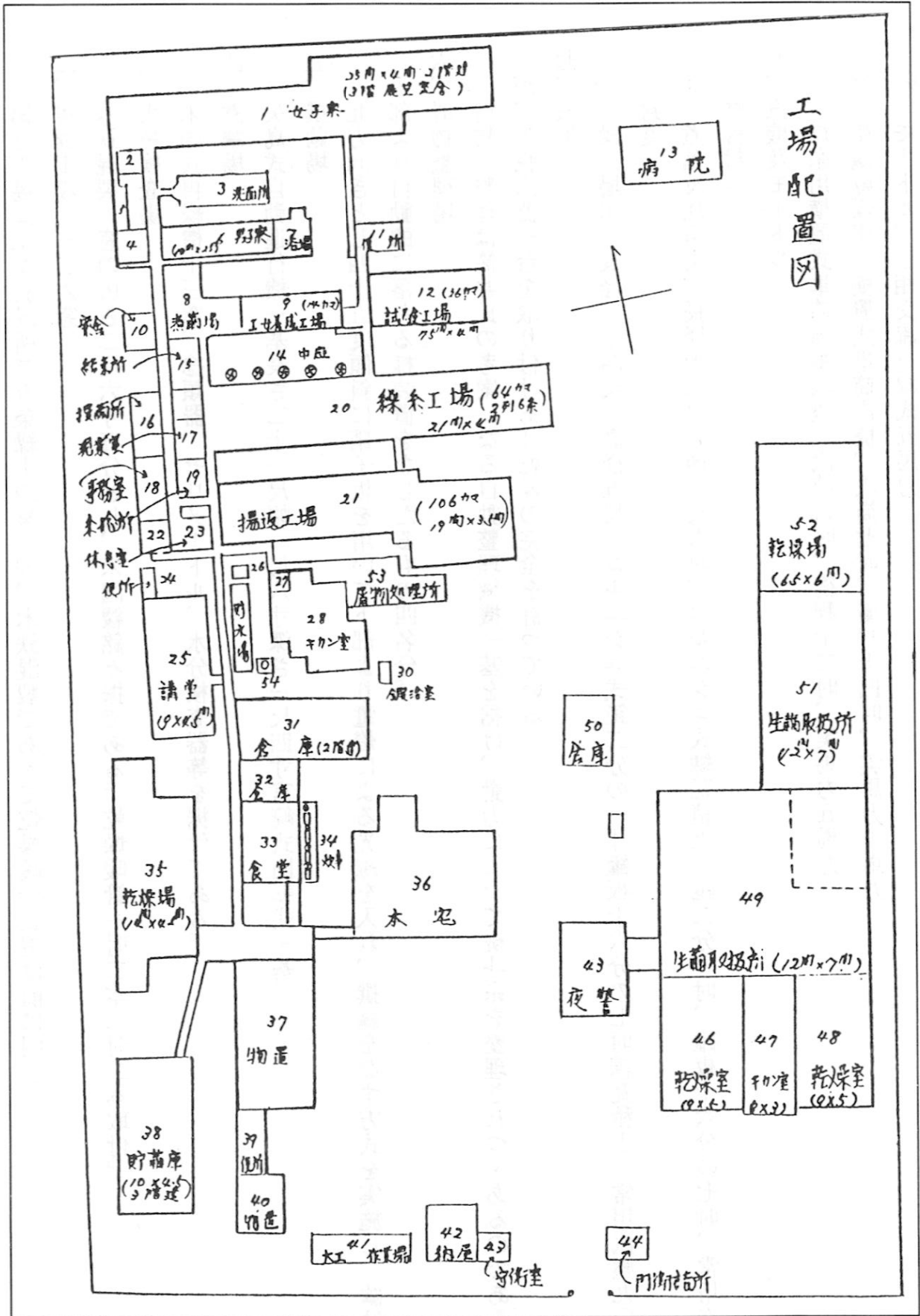
第一工場（本工場）六条繰三三釜宛向合せ六十四釜、木鉄混成である、乾燥暖管一時一本二吋一本。

第二工場（試験工場）六条繰十三釜宛向合せ二十六釜、全部鉄製で前台は真鍮板張りで乾燥暖管装置は前に同じ。

（吋↓英国の尺度約八分一二八にあたる単位）



筒井製糸株式会社全景



工場配置図

第三工場（工女養成所） 五条繰十四釜一列、木鉄混製であつて乾燥暖管装置は前に同じ。

二、揚返工場、一〇六窓

木鉄混製一窓の広さ二尺六寸五分とし、米国綾銘々振である。乾燥暖管一吋二本二吋二本取付。

三、生糸検査場

米国式再繰機十三窓、捻類器、セリメートル、水分検査器等を据付てある。

四、煮繭場

矢島式自動進行機一基長さ二十一尺幅一尺八寸深さ一尺四寸宮崎式回転式一基。

五、撰繭場

北方向きとし四十五度傾斜に硝子板を用いて下部より電燈による光線を入れ、撰繭をなす方式を実施し、繭は上部より自動的に落ちる様装置をなしたるもの四名分。

六、屑物整理場

屑物の整理は筒井氏の考案になる自動整理機械一基を据け、動力によつて熨斗糸を整理されつゝあるのであるが、尚脱水器一台を取り付けあり乾燥の完全を計っている。

七、汽缶

(イ) 繰糸場用、長径二十四尺、直径五尺、コルニシユ式鏡二分の一寸罐板十六分の七吋練瓦積上、常用汽壓九〇封度。

(ロ) 煮繭及炊事用、長径十二尺直径三尺六吋、コルニシユ式練瓦積上、鏡二分一吋、罐板十六分の七吋、常用汽壓百封度。

八、汽機及モートル

(イ) 繰糸用横置式単筒高壓汽機、汽筒六吋、衝程十二吋、実馬力五馬力

(ロ) 生繭乾燥用、横置式単筒汽機、汽筒七吋、衝程十四吋、実馬力十馬力

(ハ) モートル、三相交流三線式五馬力

九、ポンプ

(イ) オーシントン式一台、長さ二尺六寸高さ一尺二寸。

(ロ) 岡田式一台、長さ二尺七寸高さ一尺三寸。

十、生繭乾燥機

(イ) 千葉式自動乾燥機三基

(ロ) 汽熱式(多管式)二台

(ハ) 火熱式(筒井氏考案)一台

右合計の乾燥能力は一昼夜七千余貫の実力がある。

十一、生繭取扱所

板敷及びコンクリートの分を合せて四百坪である。

十二、貯繭倉庫

貯繭倉庫は三階建にしてその二階目は六方タン張りの室を六室設備しありてこの分の収容だけでも乾繭二千五百貫である。外に第一階及第三階はトタン罐に入れたるものを貯蔵し別に文庫等の貯繭用一棟がある。即ち前は間口十間奥行四間半四十五坪で後は間口八間半奥行四間三四坪であつて全収容能力は乾繭一万五千貫である。

尚、工場の敷地を拡張して専用病院一棟を設け、外にテニスコートを造つてある。その他浴場炊事場等の設備の如きは別段にその内容等を詳記するにも及ぶまい。

4、病床、筒井直太郎氏談

私が製糸業を創めましたのは、明治四十三年の一月でありましたが、最初から大規模な計画をしたの

ではありません。私が早稲田大学を卒業して帰って、事業に従事しようと思った時は、父（善吉翁）はまだ相当手広く藍商を営んでおりました。当時阿波藍は、既に衰退期に向っておりましたので、私は前途を見越し、藍商より製糸業に転向したのであります。

私の父は仲々手堅い人であったので、私が製糸業を創めるにつきましても、相当厳しい注意を受けました。そこで私たちは繭の研究から始め、乾燥場を造り、繭問屋から出発したのであります。この間、弟の源伍を先進地へ見習にやりました。そのうちに製糸所の設備を整備し、釜数四〇、工女七〇名で創業したのであります。その後、事業を少しずつ拡張し、大正十五年には四十八釜（翌年九十二釜に増設した）の脇町工場を設立し、昭和三年三月に毛田分工場（七十二釜）を設立いたしました。まずまず順調に進展いたしましたようなものの、苦心惨たんたるもので、言葉に表現できません。昭和十年の景気変動では全国の有力な製糸業が続々と倒れました。大正十二年九月一日の関東大震災では、生糸取引市場の横浜は閉鎖され、私は同志と相談し、協力を得て、神戸に生糸取引所設立に力をそそぎました。

当時に於て、神戸に生糸売込問屋「筒井商店」を設け、元横浜取引所の佐藤梁一氏を招き、主任をお願いいたしました。昭和二年にこれを株式会社に変更しました。製糸業の方も、昭和八年一月資本金百万円の株式会社を改め、阪神方面の大家に取締役として後援を願い、私が社長で弟が専務として業務を担当いたしております。

お話は尽きませぬが、唯私の一生涯の光栄として、昭和四年十一月十二日実業功労者として、特別の思召をもって愚妻携帯観菊の御苑に御招きいただいたことでもあります。この外県より善行者として表彰されたこともあります。何等善行者でもありません。

昭和十三年三月 病床にて

この談話は直太郎翁が病床の折、弘田臥石氏が「白魚片鱗」で語るものを短かくしたものです。尚同

氏は、筒井製糸所の創業時代の若き直太郎翁に「志アル者ハ事遂ニ成ルト」と表現している。しかも氏は筒井製糸所の特徴を端的に捕えている。

- 一、工場は従業員の自治化をしていること。
- 二、関連事業家と共存共栄をはかること。
- 三、生産能率の増進の投資を惜しまないこと。

今一人、中尾英一氏は次のように述べている。明治三十二年頃、当時阿波藍の本場と称せられていた鴨島は一農村にすぎなかった。藍作は本県の富国策でありながら、その取引は他府県で行われたため、原地の商工業の繁栄とは結びつかなかった。今日（昭和初年〜十年）の当町の繁栄からみても、実に隔世の感である。

しかも当町には相当規模の製糸所が相続いで起こっているが、ほとんど計画倒れとなり、この間にあって、独り筒井君のみ、事業を益々拡張され、鴨島の地を交通の拠点と化し、鴨島の存在を確立したのであります。鴨島を商工業の街として発展するにいたらした筒井君の功績は大なるものがある。

君の如きこの画期的な遠大な企業精神と手腕は、万人に与えられたものでない。しかるに君が製糸業を創められた当時は、その製品は全部内地売りの目的で、主に石川、福井両県に送っていたが、君の経営にかかる生糸は、絶対的優良で、日本一という好評が新聞所載の記事にあり、経済外交時代の国家的富致に寄与するものであります。と大正の毎日新聞を読まれた。「徳島県麻植郡鴨島町筒井製糸場は、実に日本一の能率の高い模範工場であると、製糸工場としては世界一の工場であると……普通一釜当りでは平均して年二梱内外であるが、筒井製糸では十一梱当りとなり驚かざるを得ない。」能率の上る理由は種々あるが、豊かな資力を以って経営管理に全力を注ぎ、雇った工女はやむを得ない理由ならば、一〜二ヶ月休業しても、日給三〇銭の安定賃金を支給するので、いつも工女志願が多過ぎるといふのを聞

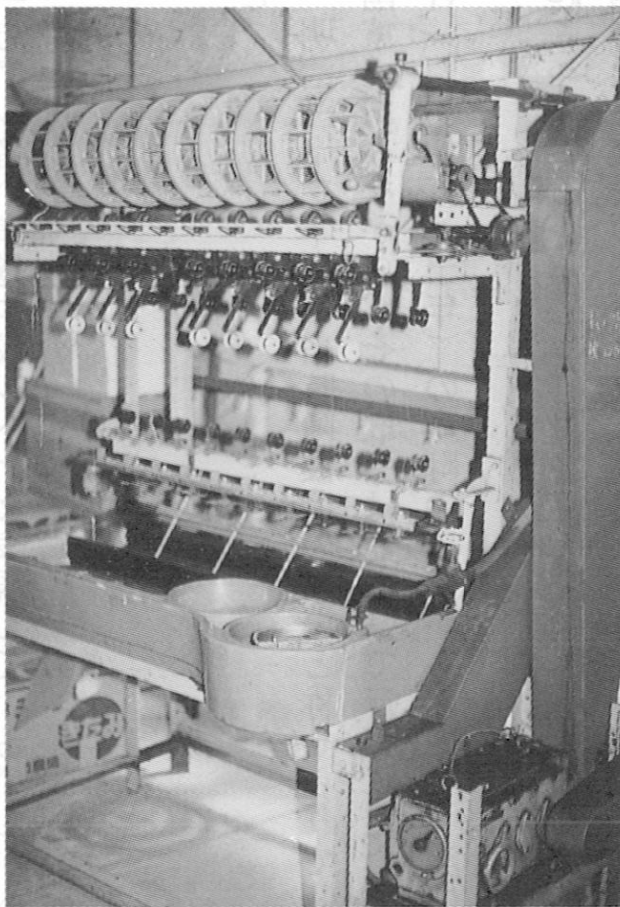
いても納得できる。また直太郎氏発明の繰糸機は一七府県に普及した優秀なものである。

—— 鴻巣久談 徳島毎日新聞掲載 ——

※ 一梱は約九貫

5、筒井式繰糸機

この装置は筒井製糸所において、多年研究の結果、各部分多くの考慮を費している。従来は座板上に直接取付けるが、コンクリートを積上げ土台を固め、動揺による振動と騒音を防ぎ、工女の神経を乱さないようにしてある。一釜分の重量は約十三貫で、間隔は三尺五寸であるため、工女は雑話を交さない得点もある。小枠回転は摺輪しゅうりんの両端に、小摺車こしゅうしゃが来るように装置され、六個の小枠は三個宛停止できる。即ち両足で踏止めをなし、糸条の切断に対し、各半分宛を停止することなく繰糸できる。敷板から小枠心棒まで四尺、摺輪中心まで四尺八寸、前台から立上りの中心まで二尺二寸であつて、従来のケネル装置に比し、余裕がある。(図面参考)

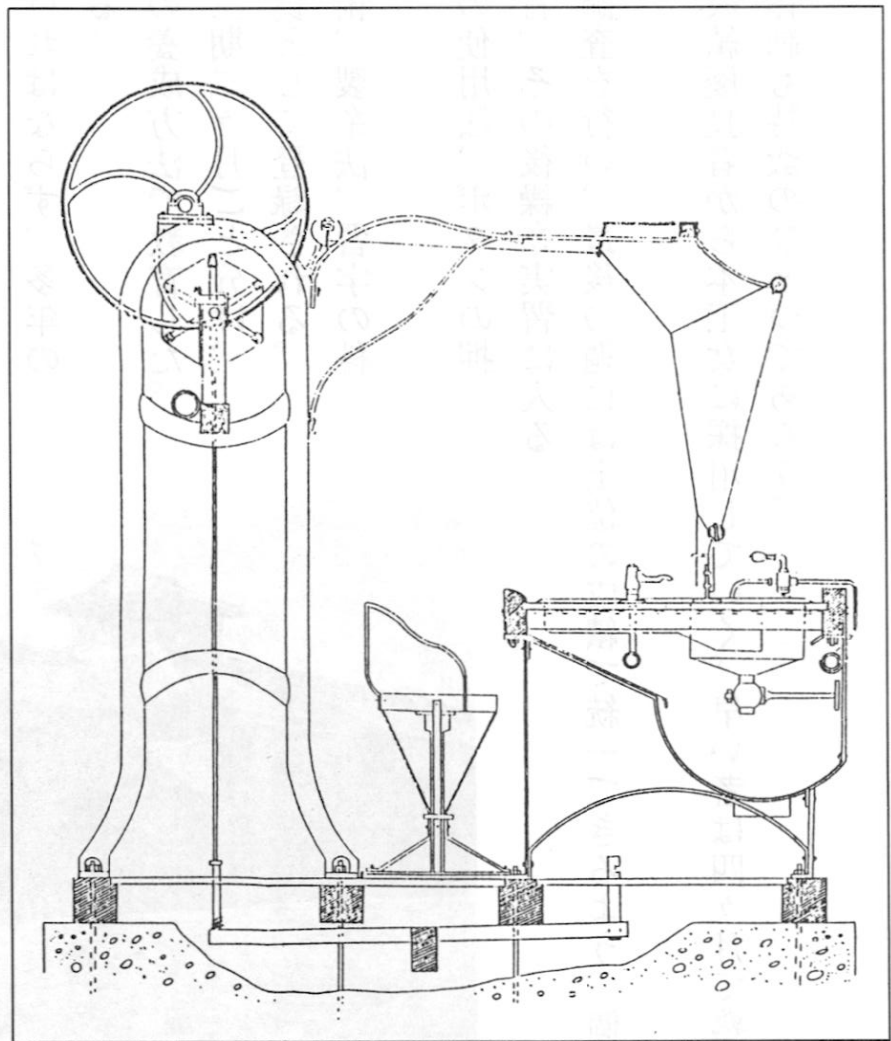


筒井式繰糸機

この装置に使用している繰糸鍋は、筒井式特許のもので、同一繰糸鍋中の一部が直ちに索緒鍋として使用できるばかりでなく、下部のコックの開口によって湯と共に流出でき、手数を省ける仕組みである。繰糸索緒等に対する温度の調節についても何等不合理の点がない。この円形半円形の形から脱した新考案に、生糸の品質、耐久力等に鑑み、特殊合金マグナリウムで製作されている。

6、職工募集と養成方法

成功した事業家は、常に優秀な従業員の力によると感謝する。筒井氏はその手本であり、従業員もまたそれに答える。しかも募集に対しては全く他人まかせである。筒井氏が知るのは人数のみで、すべて募集仲介人の手によらなければならぬ。当時は奇妙な採用方法が一般であったので、製糸業者は不幸と言わざるを得ない。だが筒井氏は信用を第一とし、職工募集には充分な注意を注いでいた。間接的な指導ともいえる次のような条件をだしている。



筒井式繰糸機械側面図 縮尺8分の1

- 一、健康なる者を雇うこと。
- 二、善良な習慣を有する者。
- 三、工場から工場へ転々とせぬ者。
- 四、前雇主の非難をせぬ者。
- 五、能力、算術を鑑定すること。
- 六、適材適所を注意すること。

当然、募集員は工場事情にも精通しなければならず、多年の経験を有する者だけに委かしたようである。

このようにして採用された工女は、次の養成方法で教育した。

養成期間は六ヶ月と定め、この期間を三期二ヶ月ごとに分け、技術修得者には、修了証書を交付し、社員として登録される。

第一期では、修身、読書、綴り方、算術、製糸法、習字の科目によって教育する。

第二期では、実習の基礎教育で、機械の使用法、ボタンの押し方、糸緒ぎ方、整緒織掛掛添等に二〇日、その後繰糸実習に入る。

第三期は、練習期で一週間ごとに成績調査を行い、最後の週には上位の成績で統一できるよう、個々特別の指導をする。

また期間中、実習試験と口頭試験との成績優良者から本工女に採用していく。早い者は四ヶ月で熟練工並となったようであるから、この指導体制も特徴のひとつであろう。



筒井製糸女子寮

7、筒井製糸所の賃金支給法

筒井製糸所では、当初から賃金支給法が、作業能率に重大な影響をするものと判断されていた。そして職工の生活安定保障が、生糸の品質の向上に正比例する事実を証明した数少ない工場である。安部忠治氏も鴨島における製糸工場にあつては、女工衰史などの史実はない。彼女たちのほとんどは、校長や町長級の賃金を手にしていたのであるからと話された。そして同社に勤務されていた宮崎忠雄氏も工女の賃金がうらやましかつたほどだと言われた。

支払は毎月十六日、現金で支給された。もちろん地方銀行と協定して、各自に預金奨励をしていた。現在においても、筒井製糸の女子従業員は、成人式の日にならで購入了晴れ着を着て参加する習慣は残っているようである。

- 1、繰糸点
生糸1本(18匁) 30点
繰糸点 = (30×期間の本数)
— (等級差点×日数)

- 2、繰歩点
3、品位点
4、繰度賞

繰度	点数	賞
310	150点	有
305	100	〃
300	50	〃
290	30	〃
285	20	〃
280	10	〃
275	0	〃

- 5、捻不同賞

捻量	点数	賞
12	45	無
11	40	〃
10	35	〃
9	30	〃
8	25	〃
7	20	〃
6	15	〃
5	10	有
4	0	〃
3	0	〃
2	0	〃
1	0	〃

- 6、切断賞罰
無切断 5点
4回まで 無
5回以上 5点罰
11回以上 10点罰

- 7、品行賞
品行を点数に付す。

- 8、精勤賞
無欠勤 30点

大正期における賃金算定法

以上のように各項の点数を算出し、賃金計算をしていたらしい。即ちこの細部まで点数により詳細すること、当時としては安定平等を保ち、雇主が理解を示すことになったのである。なお筒井氏はこのうえに経済状況を鑑み、任意に工場主賞を加えた。さらに日々の作業中に点数を気にせず、無理のないように余裕をもってできる基準にしていたそうである。そうすることが自発性を生み、よい品行を生むからである。

各職工賃金所得表(一人一日分単位銭) 大正十二年

男 種 別	三月			六月			九月			十二月		
	普通	最高	最低	普通	最高	最低	普通	最高	最低	普通	最高	最低
男現業員	五	一、八〇	七五	五	一、八〇	七五	六	一、八〇	七五	五	一、八〇	七五
同東装工	八	一、四〇	五	八	一、四〇	五	八	一、四〇	五	八	一、四〇	五
同煮繭工	五	一、三〇	五	五	一、三〇	五	五	一、三〇	五	五	一、三〇	五
同雑工	八	一、〇〇	七	八	一、〇〇	七	八	一、〇〇	七	八	一、〇〇	七
女繰糸工	一、〇〇	二、二〇	八	一、〇〇	二、三〇	八	一、〇〇	二、二〇	八	一、〇〇	二、二〇	八
同揚返工	九	一、二〇	七	九	一、二〇	七	九	一、二〇	七	九	一、二〇	七
同東装工	五	一、〇〇	八	五	一、〇〇	八	五	一、〇〇	八	五	一、〇〇	八
同撰繭工	五	一、〇〇	六	五	一、〇〇	六	五	一、〇〇	六	五	一、〇〇	六
同雑工	八	九〇	六	八	九〇	六	八	九〇	六	八	九〇	六

8、奨励会と慰安会

この外筒井製糸においては奨励会を年に二〜三回実施している。これは約一ヶ月の期間、個人及び職場単位に競技をして、成績により現金及現品の賞をだすものである。この刺激を受けて、技術の上達が果され、職場間のチームワークが発揮されたはずである。経営者にとって奨励金は失費に思えるが、筒井製糸が一割以上の生産性を高めた要因でもある。これを生糸相場のいい時期に実施すれば、何でもない賞金となったからだ。企業家の労務管理の初歩である。そして、一度上がった生産性は競技が終つてもそう低下につながらないことを承知していた。賞与の種類をみても、勤続賞、皆勤賞、品行賞、奨励

工場主—現業表	
現業係	男三人
教 婦	女四人
煮繭係	主任一人・係員三人
結束係	主任一人・係員三人
揚返係	主任一人・係員七人
繰糸係	主任一人・係員二人
繰糸工女	一三〇人
揚返工女	十一人
會計係	二人
倉庫係	二人
衛生係	看護婦一人・助手一人
掃除係	二人
庶務會計	

賞、技術上達賞、養成中奨励賞、精勤賞、競技会賞と実に賞をつくるのが巧みであったようだ。

また慰安会についても、筒井製糸は当初から春秋に、活動写真、芝居、旅行等の慰安会を実施している。労務管理上それが有利に働くことを理解していたにちがいない。

休暇にしても一週一回を与え、休憩は午前九時三〇分、午後三時に十五分間、昼食四〇分であるから当時としては、好労働条件であった。参考までに当時の職制はほぼ上記のとおりである。

この外、購繭係は臨時として男二十八人を季節的に採用した。乾燥係も多忙なる季節には七五人を雇

い入れていた。

9、生糸の検査

生糸の検査は正量検査は行わないが、原量検査中の水分検査を実施している。

(イ) 再 繰

フワリの回転は一分間五〇回として、七十五メートルの生糸を小箴しょうしんに巻き取る速度で、一時間に何回の切断があるかを検査し、回数^{回数}の多少に依って工女一人が受持つ窓数に限定がある。

(ロ) 類 節

類節は捻一より二本宛とり、検類器にかけて、糸の長さ五〇〇メートルの間にある節の数を検査し、これを五回平均したものを成績とした。

(ハ) 織 度

デニール検査は一捻より四本宛をとり、四〇〇回の糸長に付けて、五回検査したものである。平均は二〇本の糸を合して更にこれを秤量し二〇にて割りたるものに換算した。

(ニ) 強 力

(ホ) 伸 度

一捻より二本宛をとり検査し、五捻を検査し、平均をとる方法である。

切断回数	工女受持数
四回以内	一〇〇
五―八回	九〇―一〇〇
九―十回	八〇―九〇
十一回	七〇―八〇
十二回	五〇―六〇
以下略	

小節(輪節及び質節)	大類
甚だ少し	五以内
少し	一〇以内
稍多し	二〇以内
多し	二一以上

10、続、筒井製糸の沿革

(1) 最盛期の製糸業

これまで述べたことは大正十三年までのことであるが、我国の蚕糸業が近代産業としての地盤を基き、生糸がアメリカ向け輸出の大黒柱となったのは、大正十四年からであった。筒井製糸も同年三八釜を増設し、一四二釜とした。大正十五年五月に脇町分工場を設立、最新式繰糸機、隆基鉄式立繰、十条撃糸分業四八釜、翌年筒井式四四釜を設置し、弟の源五氏が経営にあたった。さらに昭和三年三月三好郡に毛田分工場を設立し、座繰七二釜を設置創業をしている。ちょうど輸出に占める生糸の割合が示しているのに歩調をあわせたことになる。続いて昭和七年十二月、鴨島、脇町工場を合同して、資本金一〇〇万円で株式会社とする。同八年四月毛田分工場を合併し、資本金一〇〇五千円とする。このとき従業員数男子二〇〇人、女子九〇〇人計一九〇〇名であった。

この時代が生糸の絶頂であった。県内でも六二工場、三九〇七釜（昭和六年）、四三工場、三三九三釜（昭和七年）で、筒井製糸は六〇三釜と一八%を占めていた。

折しも生糸はアメリカの婦人用靴下に使用されはじめ、細物高級品を要求されるようになった。即ち繰糸機は座繰より立繰、多条繰糸機が有利となり、片倉製糸は御法川式を取入れ、グンゼは独自機械を開発、筒井は半田式を採用、脇町工場はゴトー式を設置するなど、各社繰糸機の開発合戦となった。苦心の末、筒井式を考案し、昭和十二年以降は全釜をそれに移行した。さらに筒井式粒別撰繭機を発明し、高級生糸生産合戦に生き残ることができたのである。

しかしその後は化学繊維の出現により、次第に輸出は減少し、減産をよぎなくされた。

年次	輸出総額	生糸輸出額
大正14年	23億円	9億円
昭和4年	21億円	8億円

時勢は漸次戦争の色が濃くなり、食糧増産策で桑園は掘り倒され、人手不足も重なり衰退していくばかりとなった。

(2) 戦中、戦後の筒井製糸

昭和十六年ついに第二次世界大戦に突入すると、輸出は失くなり、生糸はわずかに軍需パラシュート用となった。製糸業界も全国を一本化し、日本蚕糸製造株式会社傘下に入るようになった。協町工場は昭和十八年十月より経営を移譲した。鴨島工場は同十九年より航空機製造に転換し、筒井航空株式会社となる。この当時、既に県下では片倉鴨島、筒井協町、四国繭単織維、昭和館製糸所の四工場となっていた。昭和館は昭和二十年七月に筒井が買収して航空機製造をした。敗戦はもう見えていた。

昭和二〇年八月日本は敗戦した。協町工場は復元され、筒井式多糸繰糸機一八〇台で操業をはじめた。昭和館も五十四台を製糸に復元、同二十一年より操業開始した。鴨島工場も社名を筒井産業と変更し、敗戦の精神のより所としてキリスト教を迎えたのである。

賀川豊彦牧師の伝導で、社長自ら洗礼を受け、社訓も次のように制定した。

- 一、神を愛し、感謝報恩に生きませう。
- 一、隣を愛し、共存共栄に努めませう。
- 一、勤労を愛し、富国増産に励みませう。

新しい戦後蚕糸業の出発であった。戦後の生糸輸出は食糧輸入に対する見返りでもあった。しかし国の蚕糸業の復興五ヶ年計画で工場は復元したというものの、徳島では原料繭不足の苦しい経営を余儀なくされるのである。

昭和二十五年三月、天皇陛下は敗戦で沈んだ日本国民を勇気づける目的で、四国巡行の際、筒井、片倉に御臨幸され、「蚕糸業は大切な産業でありますから、しっかりやって下さい。」との言葉のみせめての

感激とするところであろうか。

筒井製糸は、いち早く群馬に原料を求め、なんとか維持することができた。昭和三十七年一月片倉鴨島を買収し、今では県内一社となってるが合理化、機械化がすすみ、昭和三十四年より完全自動化すると、原料はさらに不足し高騰する。そして時代がすすむにつれ、どうしても我国の蚕糸業は斜陽産業となるが、日本は韓国、中国から生糸を逆輸入する世界最大の消費国となっているのも皮肉である。

昭和四十七、八年には異常とも思える高値を呼び、前途に光明を与えてくれたものの一時的にすぎない。鴨島の地に桑園が見られなくなったことから、蚕糸業の道はいばら道なのである。

※本項は筒井製糸の田中克躬氏が生前原稿を残されていたので小生如きが参考にさせていただきました。せめて御霊前にご報告申し上げたい。

文責 井内 衡

参考文献

- 「能率増進と筒井製糸」 鴻 巢 久著 大正十三年発行
「白魚片鱗」 引 田 臥 石編 昭和十三年発行



筒井製糸 協町工場

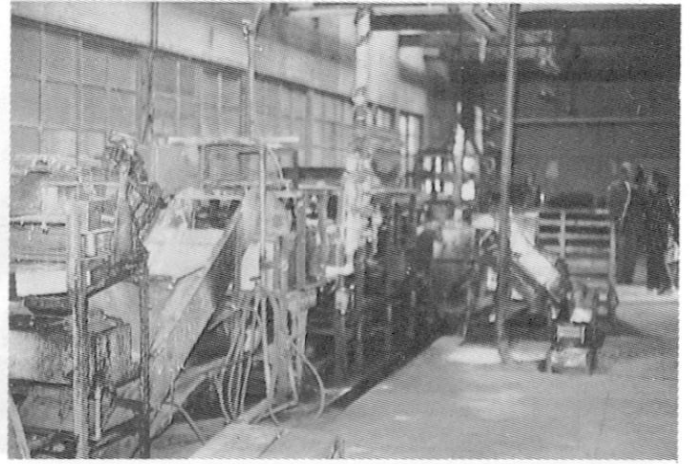
海
産
商
品

筒井製糸協町工場工程写真集

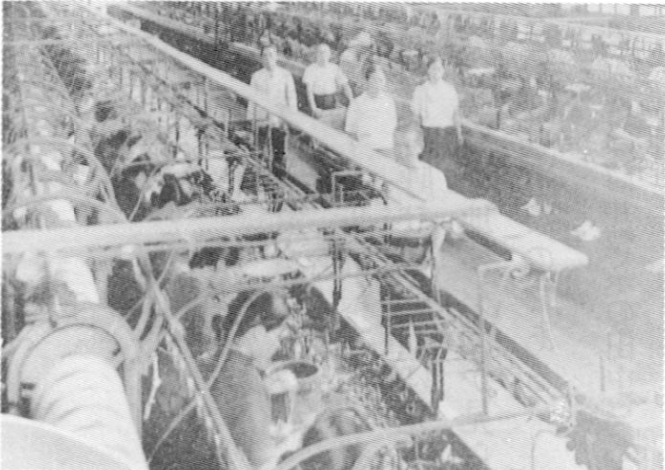
写真提供 筒井製糸(株)



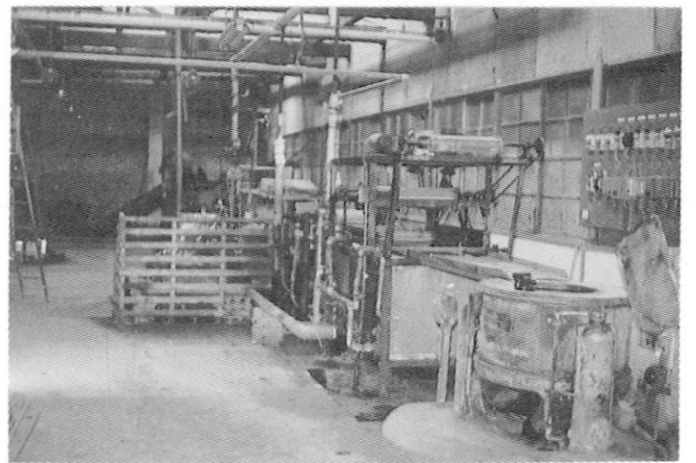
思
念
の
糸
を
主
に
な
ら
し
め
て
製
成
す



衛
生
共
同
機
器
工
場



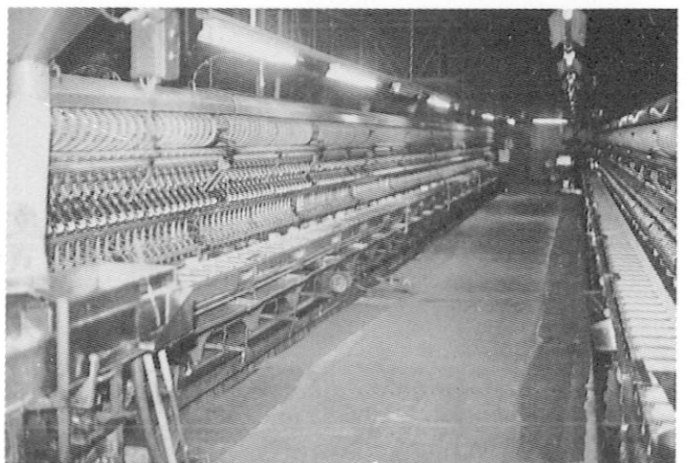
丸
糸
主
に
製
成
す
る
機
器
を
用
い
て
製
成
す



機
器



製
成
す
る
糸
の
質
を
保
つ
た
り
し
て
製
成
す



機
器
工
場

第三節 養蚕業の思い出記

1、昭和三十年頃までの養蚕

日野 喜久雄

(1) 鴨島の養蚕製糸の推移

昔から、一部の農家で桑が植えられ、原始的な方法で養蚕、製糸が行われていた。

明治になって、外国貿易が始まり、絹糸が輸出されるようになると、全国的に養蚕の気分が萌えた。一方において、藍作が不振となり、その代替えとして桑園がつくられ、養蚕製糸は隆昌りゅうしょうに向った。明治末頃には鴨島では、佐渡、筒井、松浦、笠井、岡本等の製糸工場ができていた。

大正時代では養蚕製糸が栄えた時代で、同五年から十年位の間は最盛期であった。鴨島は蚕都を誇り、全農家が養蚕を行い、製糸工場は筒井、片倉、松浦、笠井、佐渡等十三工場に及んだ。

大正八年には県下の養蚕製糸の指導所として、徳島県蚕業試験場と徳島県繭検定所が鴨島に設けられた。

ところが、昭和四年頃から人絹が発達し、養蚕業の隆昌を阻止すると共に、昭和十二年頃から国全体が戦時体制に向ったので、軍需産業に押されて衰えていった。

戦中戦後は繊維自給のため一時好調を取り戻したが、昭和二十六年頃からナイロンが普及しだし、昭和三十年頃からは、自家用電気揚水が行われるようになって、桑園の水田化が多くなった。

更に、水田へ蚕に有害な除虫剤を散布するようになり、その汚染で桑を養蚕に使用できなくなった。このようにして、養蚕は衰退に追いつめられ、町内小工場は次々と操業をやめていった。

昭和三十七年には町内最大の片倉製糸工場が閉鎖され、筒井製糸工場のみを残すだけになった。昭和五十九年の今日では、鴨島の養蚕も殆んどなくなり、町内の粟島、敷地の五農家で行われている現状である。

(2) 桑園

桑はどんな土地でも作れるが、鴨島のような沖積土には適していた。特に、河川敷や藍作跡でよく耕やされた肥沃な畑は桑園に適した。

桑の種は桑ふぐりといわれる実から採られる。桑の種を蒔いて、苗ができると、これによい品種の桑枝を接いで、よい苗を仕立て二年位すると桑園に植えられた。

昔は、桑は「けいは」という在来の桑を、畑のふちへ植え、高仕立てに作っていたが、葉の収量は少なく、実だけ多くつき、熟するとおやつに子供が食べていた。

明治末頃からは、魯桑、市平、十文字が植えられたが、だんだん改良され、質量共に蚕に適するものが作られるようになった。

桑は、畦巾うねま一八〇センチ位、株間八〇センチ位に植え、苗は三年位たつと、収量がふえて養蚕に適した。桑は初めに地上三〇センチ位から切り、そこを親株としてここから枝を仕立てた。浸水のある所では、一メートル位の高刈りにした。

桑は春蚕の後、親株を残して、刃渡り二〇センチ位の株切鎌で枝を刈りとり、株直しをして、新枝が沢山出るようにする。秋蚕の後は、枝をくくりあげて、枝が垂れて葉に土がつかないようにした。

桑園はたびたび除草や中耕を行わねばならず、桑が老朽すると、萎縮病いしゆくびょうにかかるので、重い大鍬おおくわで掘りとって、若苗と植えかえた。桑園には肥料として、春の株直しの後、株間を掘って豆粕、にしん粕等を施した。桑の枝や老木は薪に使われた。

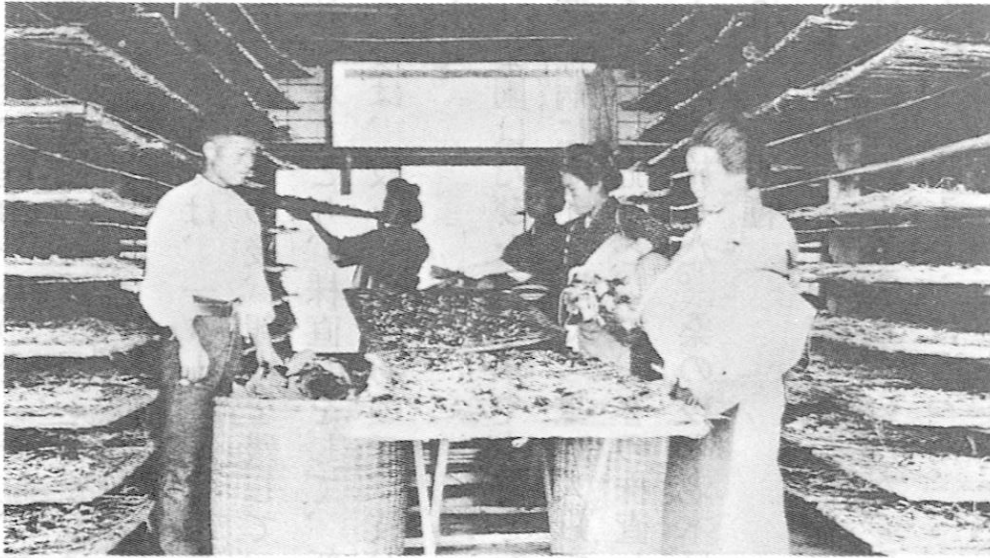
(3) 蚕種

蚕種は、繭からでた蛾に卵を産ませ、使用する。明治中期までは、県外から移入していたが、川島に麻植蚕業伝習所が設置されると共に蚕種の製造が行われ、鴨島へも配布されるようになった。

明治三十七年より西麻植の工藤館から、二十八蛾付がふ框製かまうせいの種紙が鴨島へ配布され、大正十三年頃からは、散種製蚕紙が配布された。これより前、大正七年頃は鴨島でも鈴木、後藤田、島勝の各家で蚕種製造をはじめていた。読んで筒井、片倉も蚕種製造を行い、自社へ繭を売る養蚕家へ蚕種を供給していた。蚕種は色々な状況に応じて適するものをつくられた。



桑畑



蚕の飼育

原蚕は大別すると、糸は太く健康な日本種、糸は細いが湿気に弱い支那産、糸値はよいが病気に弱い欧種の三種で、この三種の蛾を交配して、適当な種卵をうませて種にした。昭和五十九年の時点では、筒井製糸だけが製糸の原料繭確保のための蚕種を、養蚕家へ供給している。

(4) 蚕の飼育

明治、大正の頃、蚕室は、前に藍を寝かせるのに使った寢床や住宅の一部などを使用した。中には二階建ての広い養蚕室を建築した人もあった。

これらの蚕室には、たいていいろりを切りこんで保温に使った。蚕を養うには色々な道具が必要であった。まず蚕棚を立てる。

蚕棚は二メートル位の竹や木の柱を六本立て、これに三〜六メートル位の丸竹を横にわたして、十段位の棚を作る。この棚に差し入れるえびら、即ち蚕箔は、縦一メートル位、横八〇センチ位の広さで、細竹で框を作り、これに縦横斜めに割竹をわたして造ったもの、割竹をうすくした薄竹で編んだもの、三センチ巾位の枝を縦横に釘ずけにして作ったものがあった。

蚕箔に敷く蚕座といわれる蚕筵は、藁を縦糸に根と先を交互に織りこんだものであった。除沙に使われる蚕網は、藁草で編んだもので、細縄で編まれたりした。

稚蚕用としては、蚕座拡張の広さを示した蚕座紙や、稚蚕を扱おう羽掃木、竹箸をつかっていた。

給桑時に蚕箔をのせる開閉自在の給桑台があった。蚕を移動する時に入れる蚕盆さんぼんといって、紙製の厚い盆しぼに洪しほをぬったものがあつた。桑葉や繭を入れる竹製の大籠おほこもり、小籠ここもりがあつて桑籠くわこもりといわれた。

現在は、蚕箔さんぱくとして、重ねることができるとビニール製ネットが使われ、自動回転して給桑に便利になつてゐる。

蚕の飼育は五月初め、桑葉がのびはじめた頃、蚕種を催青さいせいして、稚児ちごが生まれると、掃き立てて、給桑がはじまる。この稚蚕を毛蚕けご（けご）といつた。

給桑は、桑葉をきざんで与えるが、桑をきざむには刃渡り三〇センチ位の、桑切り包廔まないたと、縦八〇センチ、横一メートル位の厚板の組板まないたを用い、蚕が大きくなるに従い、大きく切つた。

蚕は掃き立てて四日間位が一令、三日間が二令、四日間位が三令、一週間位が四令、各令毎に脱皮して大きく育つ。

四令になると、次第に桑を食わなくなり、体が透いてきて、体内に絹質が蓄積されたことを示す。いわゆる、蚕がわかえるのである。このわかえ蚕を、一匹ずつ拾つてまぶしの上に移す。これを上簇じょうそくといつた。

上簇の時には、百足むかで（むかで）まぶしといつて、繩に二〇センチ位の切藁わらをより込んだものや「こわら」といつてジャバラのように折りたたみ、使う時は広げるものがあつた。

上簇した蚕は、口から糸を出して、藁わらの間に巢ねをかけ、その中に繭をつくる。繭の中の蚕は、春は十日位、夏初秋蚕は七、八日位、晩秋蚕は十日位で脱皮して蛹さなぎとなり、繭ができる。

この頃が売り時で繭搔さかきをする。繭搔さかきが遅くなると、一週間位で蛹は脱皮し、繭を喰い破つて繭から出てくるので、遅らせてはならない。

春蚕は五月初め、夏蚕は六月初め、初秋蚕は七月中頃、晩秋蚕は八月末頃に掃き立て、飼育は約一

ケ月位で終わる。

養蚕の適温は二十度から三十度であるので、春蚕や晩秋蚕の時は、室内の温度を、いろりや火鉢を使って上げなければならぬ。

蚕には、硬化病や軟化病、細菌病が発生して、全滅したり、死籠（しにごもり）繭ができることがあるので、蚕種造りや給桑には注意を要した。

養蚕を多くする家では、人を傭った。余力のある若い男女は、金もうけのために喜んで傭われてはたらいだ。上簇の時、蚕室のせまい家では、蚕を室内に置き、人は軒下や庭に蚊張を張って寝ることもあった。

蚕の病気を予防するため、夏季には蚕具を全て川に持ち出し洗い、川原に干して日光消毒した。

蚕の飼育は、桑摘み、昼夜にわたる給桑、除沙、上簇、保温など手間のかかる仕事であったが、養蚕家は金もうけのため一生懸命はたらいだ。

春蚕の後に残る桑葉のたべ残しや蚕糞は、畑の肥料に使われたが、今では乳牛の飼料に使っている家もある。

現在は、蚕室はスレート屋根、周囲はトタン張りの簡素なものが多い。

蚕具として蚕箔は、縦一メートル、横二メートル位のプラスチックネット底のものに、下に足、上手すりを続けてレールとし、給桑箱を移動する。蚕座は四令までは防乾紙、五令は寒冷紗。蚕網はプラスチック製の條払いネット。まぶしはボール製回転簇が使われ、これは折りたたみができ、広げれば碁盤目の紙枠ができる。この簇を十段位に取りつけ、回転して繭造りを完全にする。

繭造りができると、碁盤目に合わせて、器械で繭をおし出して繭搔きをする。

今は、催青は共同掃き立てが多く、給桑も條桑を用い、除沙も簡便になり、上簇も熟蚕を振って紙枠

に上げ、繭掻きも紙杵からおし出して行われ、蚕具も飼育作業も一変されている。

(5) 繭売り

蚕が上簇して一週間すると繭ができる。そして繭掻きをする。繭掻きはまぶしから繭を一つ一つ手にとらねばならない。掻いだ繭は毛羽繰り機や手で毛羽をとり除いて売りに出した。

繭は佐渡、松浦、筒井、片倉、戸田、ひょうたん屋等の製糸業者の店頭で、繭の形、汚れ、死籠の状態によって一等精繭、二等精繭、玉繭に分けて、値段を定めて取り引きされた。

仲買人が、養蚕家へ出向いて買い取ることもあった。

現在は繭検定所で、繭から絹糸を挽いて、検定の上、取り引きされるようになった。

死籠繭や薄皮の繭は、屑繭、又はびちや繭といわれ、真綿製造や紬製造に使われた。

繭を買った製糸業者は、繭を乾燥室に入れて熱気乾燥して、蛹を殺し、袋に入れ、これを大罐に入れて格納し、生糸製造に充てた。

繭を売った養蚕家は、現金を手にして、苦勞のしがいがあつたことを喜び、次の養蚕への意欲を強くするのであつた。

(6) 製糸

昔、製糸は、自家用として繭から手繰りで糸を挽いたり、真綿に広げ、更に紬子を挽いたりした。長い間、製糸法の発達は見られなかったが、世は明治となり、絹糸を米国へ輸出する機運が出て、製糸業興隆の機が熟してきた。

明治二十五年頃には鴨島で達磨製糸が起こり、明治四十年には佐渡生糸が喜来に、四十三年には筒井製糸が鴨島に工場を設立して、工女を傭って座繰りで事業化した。その後、工場が拡充されると共に、他の工場も次々に増設された。

工場では糸質の向上と増産を求めて、機械の改良に努め、片倉製糸は昭和二十一年多條繰糸機たじょうそうしきを設備し、筒井製糸は昭和二十八年たま10型自動繰糸機じどうくわいしきを設備し、自動化へ向かった。

筒井製糸では現在CT二型半動繰糸機が使われている。

製糸の作業は、殆んど工女の手によって行われ、製糸事業の維持は工女の手にかかっていた。それで会社は工女の募集、養成、熟練工の確保に力を注いだ。

鴨島の各工場でも、数人の募集員を、三好、阿波、美馬、麻植、各西各部の山分へ出張させ、募集に当らせた。その当時は山分ばかりでなく、一般に女子の金もうけになる仕事がなかったので、製糸工女は手近かな仕事としてあこがれられていた。

会社側も小学校を卒業したばかりの、十三、四才で、よくはたらく純情な娘を、低給ていきゅうで備えるべいえることは、有利だった筈はずである。

会社では工女を採用する時には、指の屈伸と糸切り歯での生糸のかみ切りを、主として調べたとのことである。

入社した工女は殆んど女子寮に入れられ、作法、衛生、娯楽など女性として必要な教養を与えられた。通勤ができる者は、通勤を認められた。

その当時、会社は朝六時から夜六時まで操業したので、会社では朝五時半に気笛を鳴らし、出勤時刻を知らした。工女達は気笛を聞くと、急いで工場へ向かう。一般の人々もこの気笛で朝の時間を知った。

会社では工女を養成して、成績によって一等級から三等級に分けて給料を定め、優秀な者には鏡台、箆かみなどの賞与をだした。

大正年間には肺結核に対して、処女地であった鴨島にも、この病気がでて、集団生活をしていた工女の間にも次々に伝染し、十七、八才の娘盛りでたおれた悲しい思い出は少なくない。

現在はBCGの接種、レントゲンの定期検診、マイシンによる治療も行われて、肺結核は恐ろしい病気でなくなっていたが、昔は恐れられたものである。

製糸の最盛期には、鴨島に工女が七百人もいたといわれているが、彼女達は工場の勤務を終ると、鴨島の町に出て買物をしたり食事をしたりした。このため鴨島の商店は景気を上げ、町は賑わった。工女達は郷里へ送金して、家の経済を助けたことも大きかった。

工女が鴨島にいる中に、町の若者との間に縁が結ばれ、鴨島で幸福に暮している人も少なくない。

※工女……鴨島では製糸業の女子を工女と呼んでいた。女工ではフィクション映画の哀史を想像されるからである。

(7) 結び

大正の昔、鴨島は蚕によって栄え、蚕都鴨島を誇ったが、現在は旧鴨島には養蚕家は一軒もない。全町に五軒を留めるだけで、製糸工場も一ヶ所あるだけになった。

しかし鴨島の筒井製糸工場は、県下唯一の工場として栄えていて、蚕業試験場や繭検定所も県下の指導機関として現存している。

昭和五十九年の現在も、鴨島は蚕都としての面目を保っている。

2、沖繩離島生活の思い出

寺井光一

これは今から五十年も前の話です。昭和九年二月、私は当時勤めていた筒井製糸の出張命令を受けて、長期沖繩へ出張した時のことを、思い出すままに書いてみました。

その頃はまだ養蚕も盛んで、従って蚕種製造家も多く、同業者間の競争もはげしく、早春から養蚕の可能な南国沖繩へは、全国の蚕種業者がわれもわれもと押しかけて行きました。

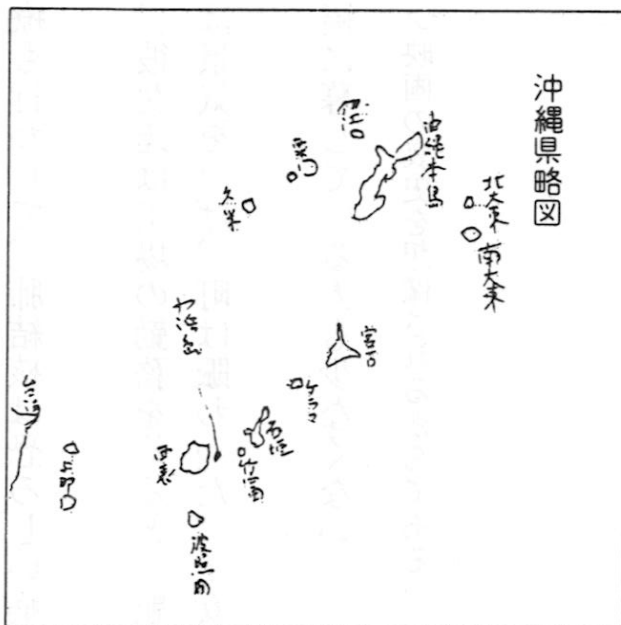
一方、社会状況は満州事変がぼつ発し、関東軍の勢力範囲は、日を追って拡大しつつあった頃でした。一般国民は、後日あれ程の大戦争になるなどとは夢にも思っていなかった頃です。

私も筒井製糸で蚕種製造の仕事をしておりました。一度は沖繩に行きたいと思っておりましたので、喜んで出張命令をお受けしました。早速旅支度をして出発しました。

鹿児島迄は鉄道で、鹿児島港から沖繩行きの船に乗りました。途中大島の名瀬港に寄港しました。そこで貨客の乗降があつて、半日停泊しました。

その時、船の中まで三人の女の大島つむぎ売りがやってきて、盛んに宣伝しておりました。

三日目に那覇へ着きました。その暖かいこと、冬から春へ一



足飛びでした。オーバーを脱ぎましたが冬服では汗がでる程です。

後藤田孝正氏が出迎えてくださったって、山本屋という旅館へ案内してくださいました。その頃、後藤田常太郎氏も健在で蚕種業から製糸業も計画しておられたと思います。何も勝手がわからない私は、今後のやり方一切を孝正氏のご指導をうけることになりました。

孝正氏のお話によって行く先は、八重山郡竹富村小浜島という、小さな離島で、既に準備のために技術員の小原君が行っているとのことです。早速、私は町へ出て、沖縄県地図を求めて帰り、開いてみてびっくりしました。目的の島は沖縄県といっても、はるか南の果ての台湾の北端より、東南島に当る西表島（イリオモテジマ）の東側に、ポツンと大豆粒位の大きさののっております。

そんな島へ渡って、お蚕相手に五十日も暮すのかと思うと、これは大変なことになったと思いました。那覇からは台湾航路の船が五日毎に出るそうで、次の便まで三日程那覇に滞在することになりました。次の日、孝正氏の案内で首里市に行き、琉球王城の旧蹟や守礼の門を見ました。

那覇市から首里行きの軽便鉄道がコトコト走っていました。那覇市の西北に辻町という江戸の吉原、京の島原にも匹敵する一大歓楽街があつて、俗に美妓三千人といわれていたそうです。その晩は有志の親交会に誘われて出席し、沖縄の美妓による歌や踊りを数々見物しました。

次の日は、離島行の準備に日用品を買ったり散髪屋へ行ったりしました。床屋の前に大きなガジュマルの木から無数の根が垂れさがっていました。

次の日台湾行に乗船出航しました。翌日はそのまま航海。三日目にボーイが時計を一時間あと戻りさしてくださいといわれて、びっくりしました。ここから先は時差一時間の西部標準時になったそうで、私にとって二十五時間の一日でした。

その日は宮古島の平良港とうひょうに投錨して、荷役や客の乗降があり、又出航して次の日石垣島につきました。

着いたといっても接岸するのではなく、港外はるかに投錨停船するのです。

途端に石垣島港からハシケがポンポンと勇ましく近ずいてきました。この船に移乗して、石垣港棧橋に上陸し、孝正氏から聞いていた港に近い宮良長伝さんという宿に着きました。

私は沖縄から体調をそこねて、少々下痢気味だったのですが、之も孝正氏の話によると、水質の変化で誰でも一度は体験するそうです。そのうち自然に馴れて平常に戻るそうですから、さほど心配もしませんでした。しかし、宿の便所へ行つて、又びっくりしました。

何やらそこらでカサカサ音がして、ブウブウグウグウというではありませんか。

便所から出て、ソツと板囲いのすき間からのぞいて見ると、何とまっ黒い豚さんが二匹おりました。豚の運動場と便所の下とは共通しておるのです。道理で便所の上から下は見えんように板を打ち違ひにしてあるのです。

目的の小浜島行きの便船は三―五日に一回で、それも海がシケると無期延期との心細い話です。

それでも石垣は八重山郡の中心地ですから町並みの方へ行くと、賑やかとのことで、町の市場へ出かけました。市場は大ぜいの人出でゴッタ返していました。露天もあり、よしず張りの店がさまざまで、雑貨、日用品、食料品、魚、肉、その他何でもありました。

見ていると、大低の品物を天秤で目方をはかって売っていました。私は、天秤の目盛りが内地とちがうのに気付きました。たずねてみると、沖縄はさとうきびが主産で、さとうきびは昔から斤きん単位で取引ききされている関係で、天秤も目盛りが斤きんになっているということでした。

孝正氏の案内で石垣在住の知人宅を訪問しました。

先ず台湾製糖石垣出張所主任の大宅道男氏（学のご出身）、ついで斎藤さんという人のお宅を訪問しました。斎藤さんの宅では、中年の婦人が座繰ざぐり製糸（俗にダルマといわれていたひとり用の製糸機）で、

繭から糸をつむいでいました。

かたわらに十才位の女の子が、手廻し揚げ返し機で、小枠の生糸をくるくると巻き返していました。孝正氏の解説によると、斉藤さんは台湾で農林学校長をしておられたそうで、定年退職後、奥さんと一緒に東京へ引き揚げられる途中、石垣に寄港した際、ふと昔の寒い東京生活を思い出して、内地へ帰るのが嫌になり、余生はこの石垣で暮そうと提案したため、奥さんと口論となったそうです。

結局、奥さんは退職金を山分けして東京へ、斉藤さんは石垣に定住することになったそうです。それで一人暮らしは不自由なので、石垣の料亭から前借の子連れ女を身受けして、炊事洗濯家事その他、諸々の雑事を弁じてもらっているとのことでした。

その晩は、孝正氏と斉藤さんと私の三人連れで料亭に行きました。お粗末な料理二、三品と、お酒は土びんでもってきました。仲居さんがお酌をして歌もサービスで、一切込みで、勘定は一人前五十銭也で、その安いのにびっくりしました。

あくる日、小浜島からの舟便が着き、孝正氏に見送られ、私は目的の小浜島へ海上三里、ポンポンと勇ましく出港しました。約二時間位たって、待望の島影が前方にぼんやりと見えてきました。近づくにつれてだんだんはつきり見えます。サンゴ礁特有の海の上にへばりついたような形で、それでも中央には小高い小山もあるようです。

海岸は遠浅で、棧橋迄船がつかず、船頭さんが海へとび込んで棧橋迄背負ってくれました。

後藤田の技術員小原君が、日焼けした顔の三人の島娘をつれて出迎えてくれました。娘達は皆はだしで、トランク其の他の荷物を頭の上に乗せてくれ、宿舎に向かいました。

宿舎は内間康文さんという宅の八畳一間を借りて、それからの五十日間、小原君と寝食を共にしました。小原君は少壮気鋭の好青年で、わたしとちがって弁舌も巧みで、交渉事には打ってつけの手腕をも

ち、滞在中、私は主として飼育全般を受けもちました。

小原君は娘達をつれて、毎日桑葉の採集に忙しく走り回る日々が続きました。養蚕中の苦労話は省略して、島内の見聞記を書いてみます。

島の産物は甘藷^{かんしょ}と甘蔗^{かんしょ}で、島民の主食はいもです。いもは婦人達が毎日畑へ行つて掘つてきます。それも今日煮る分だけ、貯わえることは一切しません。従つて雨が降る日も濡れながらいもを掘りに行きます。掘つた跡は地均らしをしてすぐに又、いも蔓^{つる}をさしておくそうです。さすが常夏の国で、いも畑には年中いもが絶えぬそうです。

島の住人は百八十人程で、竹富村小浜島では、区長さん一人が行政全般の世話をしているそうです。外部との連絡は、石垣行ポンポン船があるだけで、日用雑貨その他すべての買物は、船頭さんに頼んでおけば、万事間に合うのです。もちろん島には一軒の店もありません。

防犯の必要もないので、誰も戸締りをしないそうです。

島には漁師がいて、毎朝ご用聞きにきます。注文すれば、沖へ漁に出て魚を届けてくれます。島で魚の注文をするのは、私達二人と区長さん宅と小学校の先生位だそうです。青や赤のシマ模様の沖縄の魚は見た目には美しいが、味は駄目です。だが、毎日注文して味噌汁の豆腐の代用にして食べました。

この島はサンゴ礁の小島ですから、中央に小高い丘がある位で、山は無く川らしい川も見当らず、低地へ流れる雨水はせせらぎとなつて池に貯水せられていました。

それで天気の良い日は、その池で水浴することにしました。何分お蚕さん相手ですから、石垣へ出かけて銭湯にひたる余裕はついありませんでした。

三月も半ばになると、天気の良い日はもう初夏の感じで、仕事の合間には野外へ散歩を楽しみました。

色とりどりの草花が咲いて、きれいな蝶たちがヒラヒラと飛んでいるのを見るのは、気持ちのよいものでした。

丘に立って西を見ると、海峡をはさんで西表島がよく見えます。海岸へ散歩に行くと、バチャバチャとしぶきをあげて、飛びハゼが海辺に群生した灌木かんぼくの枝に飛びあがるのも、珍しい光景でした。

立木の枝にぶらさがっている、大こうもりを見たこともありましたが。

こうして南の果ての島の生活五十日余り、どうやらお蚕も無事飼い上げ、繭と共に内地へ引き揚げたのは四月上旬のことでした。

3、藍にかわり台頭した蚕糸

筒井敏夫

大正十二年、関東大震災で唯一の生糸の輸出港であった横浜港が灰燼はいじんに帰し、かわって神戸港が生糸の輸出港として開設された。これが契機となって、大挙して生糸を扱う直輸出入商並びに生糸問屋が集めた。三井・三菱の財閥はもちろん、近畿地方の財界有力者も加わった。おもな顔ぶれは、三井物産・三菱系の日本生糸・日本綿花・江商・兼松商事・郡是製糸ぐんぜ・旭シルク・神栄生糸・外商などで、生糸清算市場も開設され、名実ともに神戸港は生糸の輸出港として脚光きゃっこうを浴びてきた。そして横浜港も復興になると、両港から、アメリカ・フランス・イタリアに輸出されるようになった。一八九七年に金本位体制が施行され、対米為替は日本円百円に対し二十五ドルで、生糸の年間輸出額は五億ドルを突破、輸出の

王座を占めていた。

県下の蚕糸業界は、阿波藍より養蚕に移行していた。特に鴨島町は養蚕の中心地として片倉・筒井両製糸会社をはじめとし、個人の製糸家も増加の一途をたどり、田畑は桑園一色となっていた。夕方に小道を通るには淋しく恐かった思い出が残っている。

各製糸業者は、蚕種の改良、品質の向上、能率生産等にはげんだ。これには生糸の糸味が違ってくるといわれる水を選択、工女さんの技術指導、養蚕教師の派遣による指導などであった。工女さんの不足する場合は、募集員が山間部から十代の女子を勧誘して補充していた。

繭まゆの種類は白色と日支交配による黄色とで、これらの繭を蚕業試験場に各製糸業者が依頼して、繭の歩留め、開序並びにセリプラン検査などによって繭価をきめる。製糸業者に持ち込まれた繭は、選別されて引き取りが完了する。繭は春繭・夏繭・秋繭・晩秋繭・晩々秋繭とあり、これらはすべて生繭で、乾燥させ乾繭として保存する。

各製糸業者は、繭の買い入れ時期になると、銀行および生糸問屋から融資してもらい、生糸問屋はこの融資によって生糸数量をある程度確保し、年間取扱高が推測された。製糸業者の隆盛をきわめた時代は、工女さんの数が二千人をこえ、鴨島の商店街は繁栄した。

4、生糸の輸出経路および売買方法

筒井敏夫

全国の製糸業者は生糸問屋に出荷する。生糸問屋、直輸出入商は得意先の注文の生糸を輸出する。輸出先は、アメリカ・フランス・イタリアで、売買方法は現物と先約定の二通り。例えば、先約定の場合、A格で何月渡し、何百俵（単位は十俵）ときめる。商談が成立すると、十俵より生糸を摘出、セリプレ検査を売買双方の立会により実施した。

検査成績表の内容は、糸条班平均・糸条班劣等・小類・大中類・総合点・正量織度・平均織度・織度偏差・再繰・強力・伸度・抱合などである。セリプレ検査とは、格付検査で、例えばA格とかB格とか段階がある。該当する格が出ない場合はペケ、あるいは値引きで解決し、その後、拝見に移る。拝見とは、荷揃い・整理・糸味・強力・伸度・縞・固着などを肉眼でみることをいい、これが完了すると、看貫で目方をはかり、一定の水分を加えた正量取引きが変わる。

これですべてが終わり、買い方の倉庫に持ち込んで四日間経過すると、自動的に買い方に商品が移る仕組みになっていた。支払いは商社から生糸問屋の銀行当座に振り込まれる商習慣になっていた。

その間、政府は糸価安定法により、中国・韓国の生糸の輸入を制限して生糸変動を防止した。しかし、アメリカにおける排日運動、日本人の移民の禁止など対米関係の悪化と世界経済界の不況を背景に、ついに昭和十六（一九四一）年、第二次世界大戦が勃発し、生糸の輸出は完全にストップ。これに追い打ちをかけたのが化学繊維である。オートメーションによる大量生産で、天然繊維より化学繊維に移行され、生糸の黄金時代も一朝の夢と化した。

現在の蚕糸業界は斜陽産業といわれ、前途多難の道を歩まねばならぬ運命にあるが、試練の嵐に耐え、再び新しい光を浴びてほしいものである。

5、蚕糸業に一大革命をもたした

筒井製糸株式会社を偲しのんで

筒 井 敏 夫

筒井善吉翁藍商を営みかたわら、実子直太郎、源伍、真三郎兄弟協力して製糸業に対し、情熱を燃やす。日夜寢食を忘れたかいあって、漸く筒井製糸所を明治四十三年に創立した。親族一門で固め、初代社長直太郎翁は、工場長に有能な宮城長策氏を任命同社の基礎を築いた。その間各層の幾多の人々と親交を結び、蚕糸業将来の展望について研究を重ねる。営業方針に、第一質素儉約、第二能率増強、第三繭種改良等の目標に向って、着実な努力により実績をあげた。同製糸所は全国的に脚光を浴びるに至ったのは、いわゆるコストダウンのお手本でもあった。

その後昭和三年に美馬郡脇町、三好郡毛田に分工場を開設し、昭和七年資本金百万円の株式会社に変更、社長は長男直太郎氏が就任、二男の源伍氏は脇町工場を任され、三男真三郎氏は佐渡文衛門氏の養子となり、徳島市蔵本に日之出製糸株式会社を創設し、その後宮城県田之主丸に分工場を開設した。三兄弟揃そろって製糸業の立役者に成長した。

長男家鴨島は常にリードした。全国より工場システム、従業員の訓練等について視察、研修が絶えず、

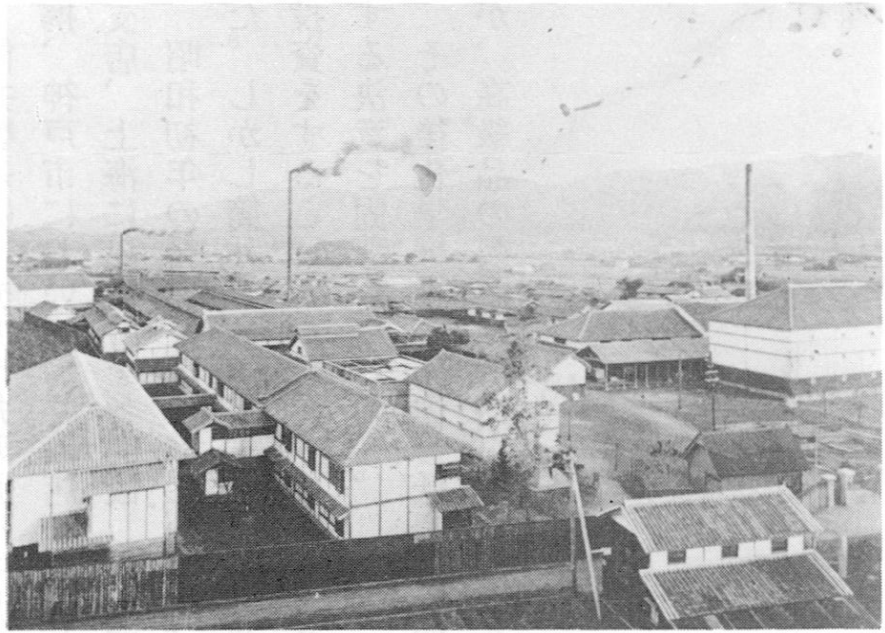
中国、韓国よりの研修生も加わった。皇室もしばしば御行幸を仰いだ優秀な近代的工場であった。黄金時代には常時七百余名、その家族を含めると三千名を突破した。阿北の名邑、蚕都鴨島、金融の中心地としても偉大なる足跡を残した。

県外に向けると、関東大震災（六十二、九、一）が起き、唯一の生糸輸出港、横浜は灰燼に帰し、大挙して生糸関係者は神戸に集中し、大正十三年神戸港がその任を果すことに尽した。

筒井製糸は、横浜市弁天通り中沢商店支配人の佐藤梁一、三重県亀山市亀山製糸社長の田中音吉と提携、神戸市において筒井商店を創設した。更に神戸取引所蚕糸取引員、豊橋市に乾繭取引員、横浜市に支店、上海に出張所を各開設し、年間輸出額五億ドルで首位を占めるに至った。

昭和初年の経済不況は厳しかった。大学を出たけれど有能な青年も職がなく、不景気のどん底であった。しかし筒井製糸は人材を求め、着々と整備した。阿部忠治氏によると直太郎氏はこんな時こそ設備投資をすると言われたそうである。そして、民政党より政界入りの要請があったが、蚕糸業一筋に邁進する決意を固辞したという。

その後化学繊維の発達と低開発諸国の侵食に、我国蚕糸業も生死をかける重大な時代と直面しているが、高級品の製産に活路を見い出され永続を願うものである。



片倉製糸紡績株式会社鳴島製糸所

な存在であった。

※片倉鴨島工場の起源について

この工場の元は、当地に於ける斯業の先覚者、佐渡文右エ門氏が明治四十年六月に個人経営として創立されたものである。大正七年五月に株式会社高知製糸に譲渡、同社の鴨島分工場となり、次で大正十一年一月、片倉製糸紡績株式会社が高知製糸より買収し、同社鴨島製糸所と改称した。同社は御法川繰糸機二五八台細糸十四中優秀格製

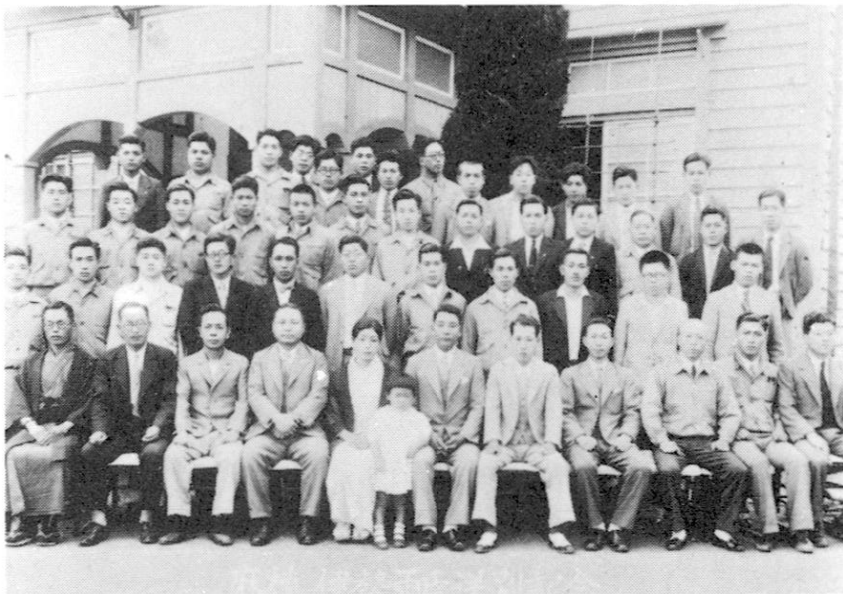
6、片倉製糸会社と

鴨島工場について

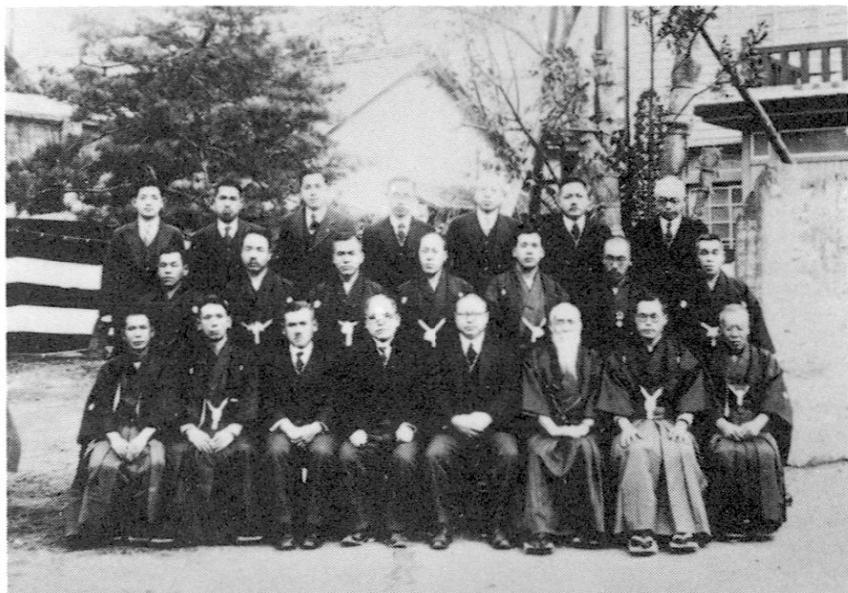
井 上 進

戦後もわが蚕都鴨島町に、地元の製糸会社、筒井製糸所と共に並び立った片倉鴨島製糸所は、当時を偲んで忘れられない存在である。

現片倉工業の前身片倉製糸紡績株式会社は、日本製糸会社の宗家とも言えるもので、最も盛んな昭和初年にあつては、世界最大の製糸会社であつた。日本列島の至るところに工場を有し、支那朝鮮にまで工場を進出していた。その工場数は製糸工場のみでも実に六十四工場を数えた。そして同社は日本の生糸製造額の三割に近い生産をあげていた。当時の輸出産業の花形、生糸の片倉として、日本国にとって極めて重要



片倉製糸入社記念



片倉製糸記念写真

産工場として知られていた。従業員約四〇〇名、最大時の消費原料は約十五万貫（一貫は今の三、七五kg）で、当地方の養蚕農家に親しまれ、商店街の繁栄にも永く寄与したのである。しかし地方の農産業の変革が繭の減産となり、原料繭の不足を来たすようになった。しかし高知県より原料繭の移入を計って、繰糸を続けていたが、採算的にも不利となり、同社高知工場の閉鎖より四年遅れて、昭和三十六年三月惜しくも閉鎖となった。永く当町に親しまれた工場の火は消え去った。

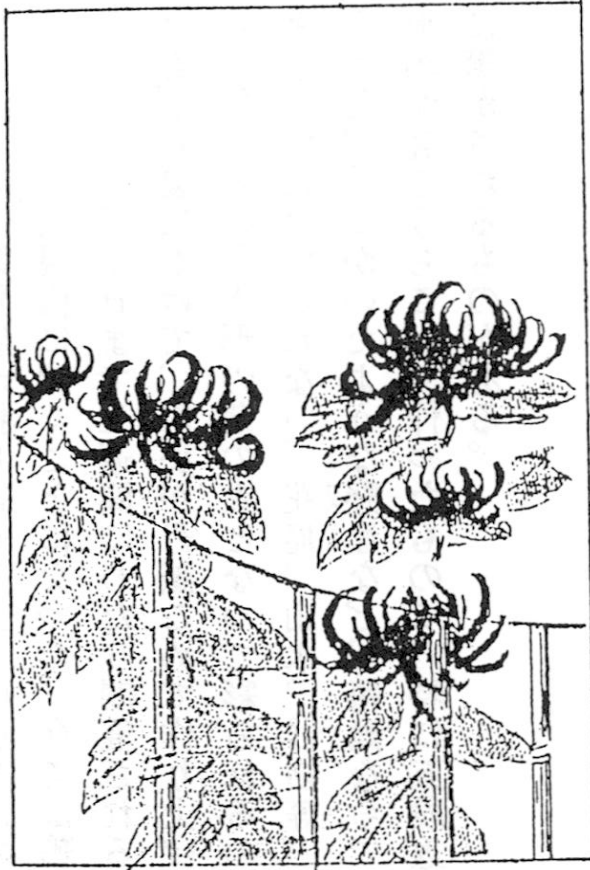
現当町金光通東側に並び立つ住宅団地が元製糸所の敷地で、当時を知る町民の思い出つきないものがある。

第六章 菊の鴨島

第一節 鴨島名物菊人形

1、華やかし頃の記録

菊の鴨島か、鴨島の菊かと歌われ、秋の行楽の一つとして、四国はおろか関西にほこっている菊人形それは製糸業と共に我が町の花である。



黄菊白菊とりどりに

花を咲かせた人形の

ゆかしき姿君見ずや

花の衣のうるはしさ

◎

五段返しや七段の

電気仕かけの人形の

めぐるや秋の菊の色

花の香のかんばしさ

この菊人形は、今から七年前大正十四年の秋、筒井製糸所の前に「鴨島菊人形」の幟はたを見たのが、そもそも我が菊人形のはじめであった。それから僅か六年の間に、このように有名になったのを見ても、

如何に我が町民が菊の栽培に興味をもち、熱心であるかがうかがわれる。

これは本町の筒井嘉太郎氏が主唱となり、町民の娯楽のためにつくつたのである。県の内外から一日何千人という観覧客が押し寄せるようになったので昭和二年に至り、遂に四十アールにあまる菊遊会場を設けて、大規模に開くことになった。今では鴨島の秋にはなくてはならぬ呼び物で、毎年十月三十日から十一月二十日まで三週間にわたり開催されることになっている。

春から夏にかけて、町民が丹誠こめて作り上げた菊は、何百という美しい花壇になって場内にかざられ、何十という人形の菊の衣となって彩られるのである。形状といい光沢といい、さすがに鴨島の菊と感心せずにはいられない。花島、山水、器物等の形につくられた白菊、黄菊、一株に何百輪と咲きほこる大菊、絵にかいたような懸崖^{けんがい}など、鴨島ならではの見られぬ名花であろう。菊人形は、名古屋一流の人形師が魂をうちこんで作ったもので、特に五段返し、七段返しなどはじめての人はその美しさと巧みさに驚かされるものがある。

(昭和五年「鴨島読本」より)

2、鴨島大菊人形の紹介

当時(菊人形の確立期、昭和五年)の菊遊会宣伝部長の任にあたられていた和田撫山氏は、ファイ

ルの習慣をもたれていたもので、捜してもらった。惜しいことに昭和五年のは見つかったが、それ以外はなかった。

しかし、この新聞抜粋帳からも鴨島のビッグイベントの様子を想像することができる。

●徳島毎日新聞（昭和五年十一月三日分）

咲いた菊花!!

華々しく開場した

鴨島菊人形

会期 十月三十日～十一月二十日

咲いた鴨島の菊花!! 菊人形は堂々と十月三十日午前九時から開場した。会場の装飾、電飾、行届いた花壇の配置、人形館三段返し、五段返し、及見流し各場面の莊麗華美を極めその精巧は斯界の絶対的權威であり、全く他の追従を許さぬ出来栄えを見せている。開場当日の三十日、そぼ降る秋雨に溢れんばかりの数百の出品花壇、色とりどり研を競い、美を争い、一層その香り漲り色濃ゆく、待ちわびた観客会場へ会場へと押し寄せて行く。初日の観客阪神方面からの人々、口を揃えて菊花の栽培に於いて盆養造等の出来栄えには非常

な賞讃の声をあげていた。かくして地元之余興源之丞人形芝居は初日から十一月三日まで、四日から八日までは大阪伊藤興行部総出演の高級漫才等あり、鴨島町商工会の総合大売出しに全町紅白の幔幕小旗を引巡らし、さながら御大典当時そのままに婦人会員の自転車預かりに異彩を放ち、全く歓楽の巷、菊花の名所、鴨島は大不夜城を現出している。行け!! 鴨島の菊花、菊人形見物に：因みに本県知事を総裁とする鴨島菊花奨励会第六回菊花品評会は既報の如く来る十一月五日同会場内にて切花審査を興行、翌六日賞状授与式行

うのである。切花出品者は左記によりたいと尚審査表は斯界の權威神戸鈴木長吉氏一行来果なすべしと

- 一、種類：厚物、厚物走、太抱、太管、細管、針管、一文字、競技花
- 一、出品花：切花一尺八寸、但し半咲以下の花は等級外とす
- 一、賞品：各種類共優等、特等、一等より五等まで、競技花呉郷の響には優賞旗及副賞品、その他各等へも賞状及賞品を授与す

その他については、見出しのみ紹介する。

●昭和五年十月九日

秋色ふかく会期迫る!!

菊の芳香漂う

鴨島大菊人形

素晴らしい大馬力の準備と忙殺

●昭和五年十月十三日

菊花の鴨島!!

鴨島菊人形と

菊花品評会

来三十日から十一月二十まで

●昭和五年十月二十一日

秋の一大歓楽境

鴨島大菊人形

待たれる三十日の開場

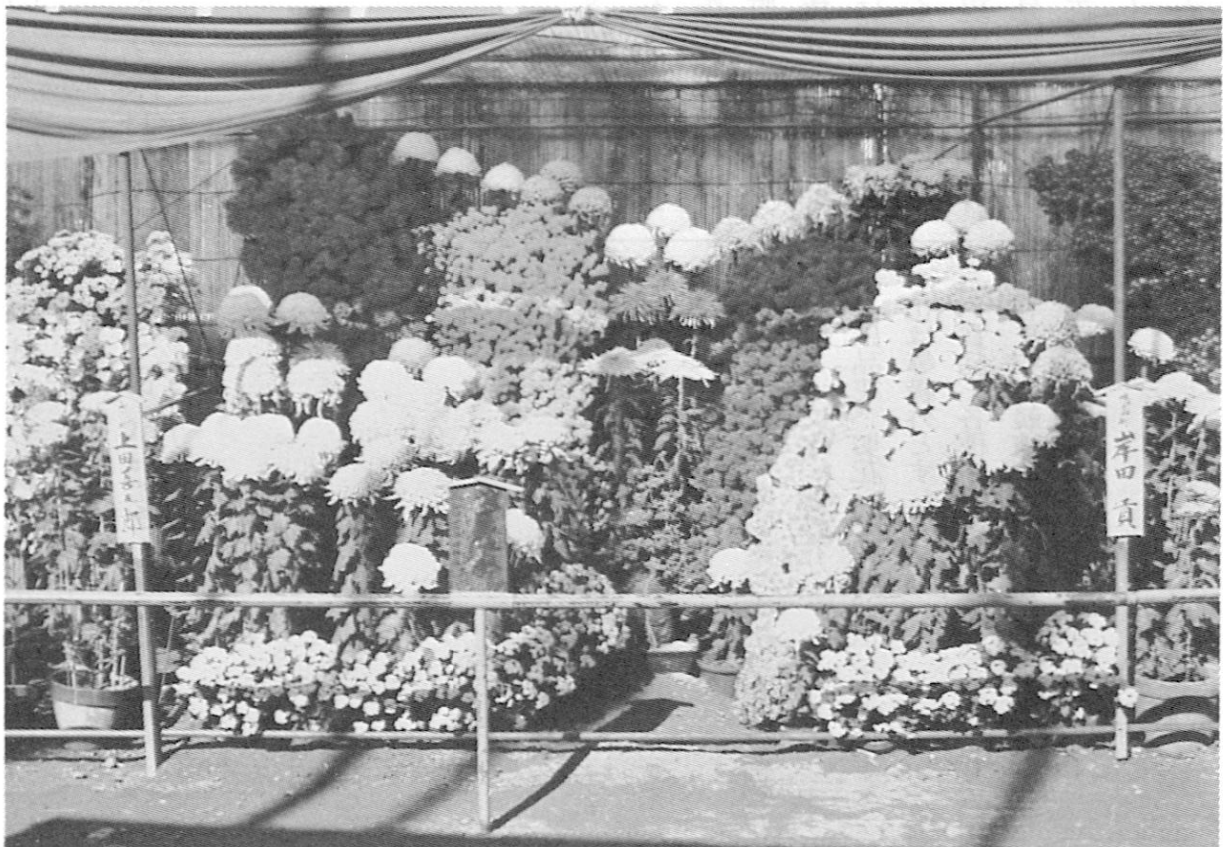
●昭和五年十月二十四日

開場近づく

鴨島菊人形

ほとんど完成した見流人形

見事な本年の花壇



●昭和五年十月二十九日

鴨島大菊人形

設備の完成と菊花の満開を期し

愈々十月三十日開会

●昭和五年十月二十八日

大会気分濃厚に

鴨島菊人形完備

菊地幽芳氏を迎え

品評会十一月五日・

六日賞状授与式

どの記事にも一段ぬきで、詳しく情報が掲載されている。

徳島日日新聞によると、さらに詳しく紹介している。

●昭和五年十一月二十五日

― 本社後援 ―

過去六ヶ年の経験で

総ては完備す

鴨島の大菊人形

開場迫る

本年の大規模



創設以来六ヶ年栽培家の技益々園熟し、菊人形その他にも経験を積んで来た麻植郡鴨島町菊遊会主催の菊花品評会並に菊人形は、朗報の如く三十日の開場を前に着々準備を急いでいるが本年は出品数もおびただしく増加し、花の出来栄えも見事にて既に一部の搬入あり、懸崖、銀月出品の大菊千輪咲の如きは一株に

鴨島の菊は世界一である。

今年は気づかっていた天候もすこぶる順調であったので、過去六年間の経験による栽培技術の進歩と相伴って花葉共に予期以上優秀な成績であげている。菊人形も枚方やその他にも既に名所となつてゐる所が多いが、これらは規模の大と数の多いことを以つて誇りとし、呼びものとしてゐるので質の上から見る

四百余輪を咲かせ、燈明たい形胡蝶形、鶴形を始め各種の珍形は一般愛菊家をして垂涎せしむべく花壇の配置も亦巧妙を極め年共に歴然たる進歩の跡を見せている殊に梅の湯、花壇の如きは百余鉢他よりも早く、既に笑みこぼれんばかりの様である。菊人形にあつては本能寺の電気応用火炎、岩見重太郎蛇退治、

と、鴨島は決してその下流にあるものでない事を信ずる。

特に菊に至つては、将来はとにかく、本年の成績を見ると先ず世界一といつても決して過言でないと思つてゐる。

鴨島にそうした催しが出来た事が各地に愛好熱を昂めるは、同好者として真に悦ばしい

仙たい高尾等、素晴らしき背景を用い、一見恍惚たらしむべく五段返しは既報の如き場面を見せ、今年には新たに三段返しの一館を新設するなど、一步先へ先へと設備を整えているから開場の暁は定めて圧倒的な人気を見るであらう。

筒井嘉太郎氏談

事で、それだけ鴨島の菊は四国における最初の企画であり、名実共に菊の本場の観がある。この所まで育てて来て下さつた菊花ファン諸氏のためにも、決してその絶大なる御支援に酬いたいと存じてゐる云々。

● 徳島日日新聞も写真とともに、連載で報道している。見出しのみ紹介する。
昭和四十五年十月二十三日

鴨島の大菊人形

電気照明で燦爛たる

錦織を織り出す不夜城

いよいよ開期三十日からと決定

●昭和五年十月二十八日

名物 鴨島 大菊人形

菊花の満開と犠牲的

高級余興の上演

昭和五年十月三十日

けふ華やかに

鴨島 菊人形 開場

押し寄せた人の波

●昭和五年十一月二日

開場以来昼夜盛況

鴨島 菊人形

沸き立つ人気

●昭和五年十一月十日

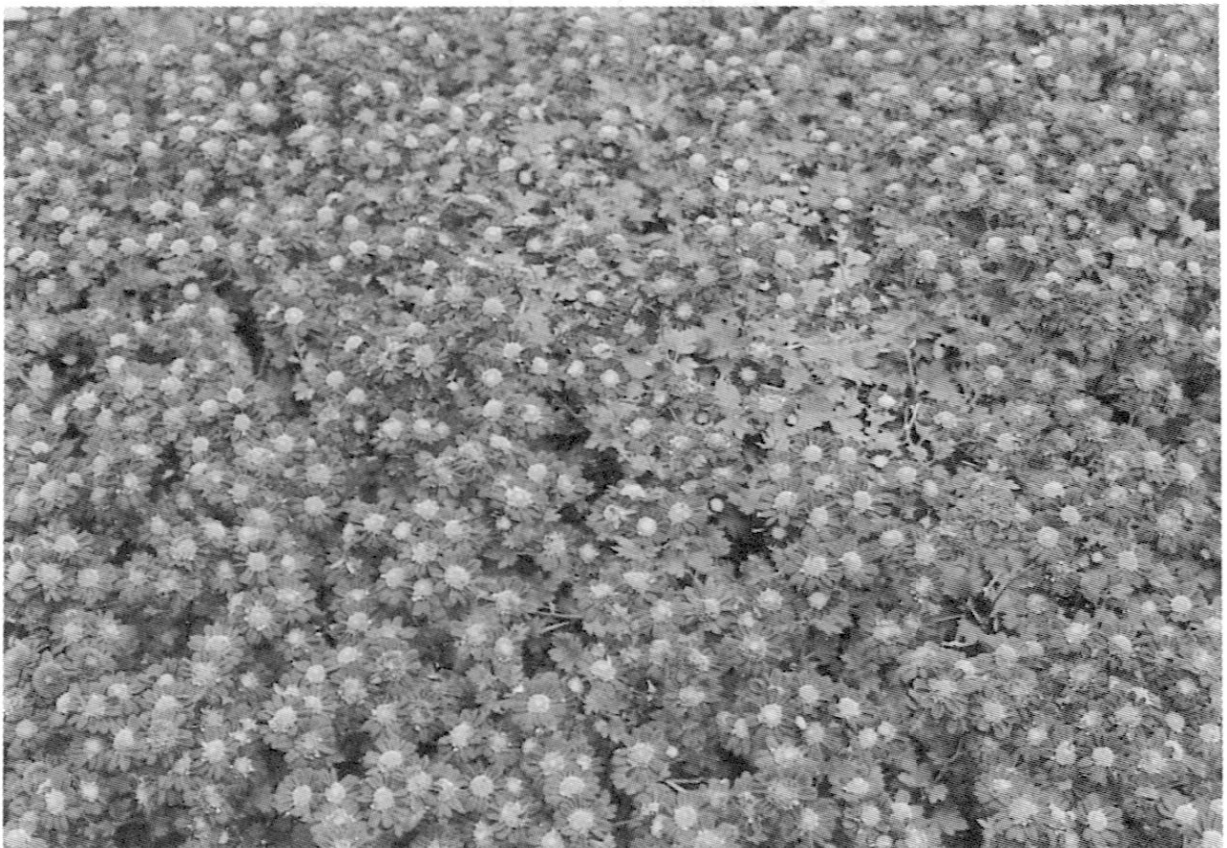
阿波の秋芳会の

菊花品評審査

九日鴨島にて行う

●昭和五年十一月三十一日

鴨島 大菊人形



三十日、華やかに開会

人の波は鴨島へと続く

など一年間だけでも切りがないほどである。

両新聞が共通してふれていることは、

- 一、読者には二割で割引くこと。
- 一、婦人会の自転車預りと休憩所における社会活動のこと。
- 一、余興の犠牲的奉仕によること。
- 一、佐尾山忠作氏（栽培部長）の熱意のこと。
- 一、その年のメイン、本能寺の場面のこと。岩見重太郎の大蛇退治のこと。
- 一、舞台バックの電気照明のこと。
- 一、その年の花壇の立派なこと。（入賞が期待される、銀月の大輪咲きのこと）
- 一、阿波縦貫自動車が開催中、午前七時より午後十時まで、徳島・鴨島間を十五分おきに両地を出発し、六十銭で、家族単位では一人五十銭に値引きすること。
- 一、見出しが命令調であること。例「見に行け！」などである。

鴨島の菊のはじまり

菊遊会々長 武 智 加之吉氏 談

近ごろ製糸業の発展に対して、世人よりの声は、「工業の鴨島」との称呼を受けることになったが、これは経済的な面をみてくれたのであるうけれども、人間味に生き、風流とか、趣味とか、楽しみの純美を求め人とするものは、何となく嫌ならぬのである。

「鴨島の菊か、菊の鴨島か……」、と人は言うも、もはや鴨島の問題でもない。否や本県の問題でもなく、関西第一の設備で、他の追隨ついでを許さないとまで歩みきたのは誰の業であるか。

日々物質的な気粉に疲れ果てて、唯一の慰めとしての要求でもあろうが、思えば六年前（大正十四年）に友人の筒井嘉太郎氏がこの気に対して、世界的に研究したものを基盤として、菊友会が生まれた。その後、昭和三年に菊遊会と改名し、同好者が寝食を忘れる位の熱心を以って、大衆的に設備したのが、鴨島の菊の誕生である。

過去を追憶すれば、なかなか苦心さんさんを払って賛く今日に至った。

第二節 鴨島の菊と私



藤川良雄

1、私の第一印象は「菊人形の町・鴨島」



昭和六年十一月、鴨島町鴨島三五番地、現駅前中央通りに病院を開設し五十余年、半世紀以上鴨島に定着、年齢すでに八十四歳となりました。

老人会の和田芳子女史の勧めに応じ、鴨島の思い出を書いてみることにした。

思い出でも種々あるが、私が開業した時が菊花薫る秋の十一月でありました。

鴨島の街も菊人形の最盛期で、菊人形の見物客で賑わっていました。従って、私の鴨島に対する第一印象は菊人形であり菊でありました。私も菊の魅力に引かれ菊の栽培を始めました。菊人形、菊遊会など関係が出来ましたので、菊に就いて書いてみようと思います。

2、菊のお話いろいろ

先ず菊に就いて一般的なことを書いてみたい。菊は皇室の御紋章にもなり、一般国民からも広く愛せられ、日本国中いたる所で栽培せられている。

菊は花の大きさにより、大菊小菊その他中菊などと区別せられている。又、咲く時期により、最も普通に咲く秋菊、夏冬に咲く夏菊、寒菊などと、年中殆んど咲いている。

又、日本国中各地で栽培せられ、各地各様の特色ある菊が作りだされ、有名な菊には、奥州菊、江戸菊（現東京江戸時代作出）、伊勢菊、京都の嵯峨菊、九州の肥後菊など、特色あり雅味豊かな菊がある。大菊には、厚物、厚走り、太管、間管、細管、針管、一文字など美しい花形をみせてくれる。小菊もその花形も丁字味その他種々花形のものもある。

菊の色彩も、「黄菊白菊その外はなきものかな」といわれる如く、白、黄の純色が尊ばれる外、赤色

菊その混色ももの多種多様である。

3、菊人形と菊遊会

次に菊人形と菊友会（昭和三年菊遊会と改称）のことについて述べてみたい。

鴨島は、吉野川流域の藍作地帯として、江戸時代、明治時代には隆盛で、日本全国に阿波藍の名を高らしめ、藍商人は全国に広がり、鴨島地方も藍作の本場として経済的に豊かで繁栄していた。然し、藍は化学染料のインジコの発見により、次第に衰微していった。

阿波人は藍に代わるものとして桑園を作り、養蚕に取り組み、繭の生産を計り、更に生糸工場へと発展させた。

昭和六年頃は生糸工場は鴨島地区に集中し、大小十指に余る生糸工場が林立していた。

当時、生糸は羽二重等絹織物やお茶などと共に輸出品の花形だった。

鴨島は県内でも、徳島に次いで経済的に豊かで、町全体が活気を呈していた。

半世紀前には一般大衆娯楽は、わずかにラジオができたばかり、その他、活動写真（現在映画）や芝居が地方の娯楽の中心で、鴨島では文化座（現在のマミーカモジマ）や菊遊座があった位であった。

活気溢れる鴨島町に何か娯楽施設をという必要に答えて、筒井嘉太郎氏（筒井製糸の一族の方）が、大正時代に枚方（大阪）の人形師を招き、菊人形を始めたのが菊人形の始まりのように聞いている。

昭和六年、私が鴨島にきた時には、川真田市太郎氏（万本家）宅、現麻植協同病院の東側に菊遊座があり、菊人形が十月下旬より十一月にかけて開催せられていた。

当時一般に娯楽も少なく、時期は農閑期となり、農家の人々の骨休めの時期でもあり、鴨島近隣のみならず、県内から多数の観客が菊人形に集まってきた。交通の便も主として汽車やバスで、自家用車など殆んどなく、日曜、祭日には菊人形の見物客は、鴨島駅から銀座通り、菊見通りなど列をなしていた。現在、銀座通り南の菊見通りは、当時の名残りを止めているものである。

当時、菊遊座は大阪枚方の菊人形より人形師を招いて、菊人形を製作展示するほか、菊花々壇切花等菊遊会々員の品評会を開き、これを展示していた。

鴨島には菊の愛好家も多く、菊人形の発足と共に、鴨島は勿論、遠く徳島市内の愛好家など、県内の同好者多数の参加による菊遊会を作っていた。

菊人形の時期には、大菊の花壇、小菊の懸崖作りや、盆栽作りの花壇、その他菊の作り物などの外、菊遊会々員の切花、各菊の厚物、厚走り、太管、同管、針管、その他会より選定競技花などの品評会を十一月三日の明治節の日を中心に行い、菊遊会々員の腕を競っていた。

当時、大菊の花壇は、現在の三輪仕立ての鉢でなく、五輪仕立て、一花壇十五鉢三列に並べ、まことに見事なものであった。

花壇は菊花の作行は勿論のこと、色彩配合、各菊花のバランス、花壇仕立ての巧拙など種々苦心を要した。

懸崖小菊の花壇など、大なるものは丈余（三メートル）に及び、小菊の花の取り合わせなど、種々変化をみせた。その他小菊は盆栽作りで種々盆栽にみる技巧をこらし、石づけ古木作りなど珍しい物が陳列せられた。

4、和田千賀一氏の後を継いで優勝

菊の愛好家に齒科医師の和田千賀一先生（和田誠介先生の父君）がおられ、菊を愛せられていました。当時、十五鉢の立菊花壇を作り、品評会で優勝するには、少なくとも五輪仕立の立菊百鉢は仕立てなければならず、なかなかむずかしいことでした。

立菊百鉢以上も育成するとなれば相当広い面積を要しました。そこで小生宅の中庭が広いので、和田先生の立菊の作り方など学んでいる間に、小生も菊にとりつかれました。

和田先生は菊作りの名人の一人で、昭和七年から小生宅で栽培した立菊花壇は、菊遊会の品評会で優勝し、優勝旗をとられました。

その翌年の昭和八年度、続いて九年度と三回連続優勝せられ、優勝旗を連続獲得したため、規定により優勝旗は和田楽々園の手に帰しました。

昭和十年和田楽々園が品評会より辞退した後を受けて、小生が三ヶ年の菊造りの経験により、引続き菊花を栽培することになりました。

当時、菊遊会同人で菊の名人達は多く、菊遊会専属の技術者として佐尾山氏（現ふたば園の御尊父）がおられ、会員の栽培指導に当られていました。多くの優秀なる愛菊家が鴨島近在より、更に徳島方面にまでおられました。

その中でも、川島の素封家（山又）中村氏は特に優れ、菊遊会専属の佐尾山氏も特に力を入れて指導していただきましたので、何時も立派な大菊花壇を出品せられ、小生と最優秀を競いました。

菊遊会品評会には、神戸から菊花の権威者が来鴨せられていましたのが、出品者一同栽培に熱が入りました。

私も菊花について種々研究し、和田楽々園の後を受けて優勝を目ざして菊花栽培に精根をつくしました。

昭和十年の菊遊会品評会では多くの立菊花壇を抜いて、見事藤川精興園は最優秀となり、優勝旗を手中に収めました。当時和田先生や川真田貞助氏などの応援を得て、花壇の最後仕上げに努めたことが思われます。

昭和十年以後も、和田楽々園の三年連続優勝に続けと、一層菊造りに努力致しました。その甲斐あって、藤川精興園も三年連続して優勝し、優勝旗を永遠に手に入れることができました。そのため、立菊花壇の品評会出品は遠慮して辞退いたしました。

菊人形も、満州事変以来日本の軍国主義的色彩が濃厚になるにつれて、食料増産が叫ばれ、家庭々園も開墾され、各人自給態勢をとらざるを得なくなり、菊の栽培どころでなくなりました。

第二次世界大戦に突入し、戦時体制は益々強化され、菊花栽培も次第に衰退していきました。私も昭和十九年、陸軍々医として応召するに至って、菊花の栽培とは無縁のものとなりました。

5、美しい新品種を求めて

菊花を愛する心情に変わりなく、中国の詩人、陶淵明の東籬の菊の故事にちなんで、庭先に菊花を植えて楽しんだ。

亦、夏菊、秋菊、寒菊の最近の如く、生け花用として一年中何時でも楽しい菊が見られるので、東籬の菊の外に生花として秋をたのしませてくれる。

夏の菊に就いて書き留めておきたいことは、菊の品種のことである。



藤川先生の優勝旗

菊は一般に芽分け挿し芽によって増殖もし、栽培している。然し菊は、他の一般草花の如く、花後結実して、この種実をまいて仕立てる実生法のことについて案外知らぬ人が多い。

菊にも雌しべ雄しべがあつて、雄しべの花粉が雌しべの柱頭に付いて受精して結実するのである。

この結実には自然に昆虫を媒介して行われる。然し人工的に特定の菊の花粉を、特定の菊に受精せしむることができるようになった。

人工受精し結実した種子を、翌年実生畑に播種し、多数の実生苗を作る。

この実生苗は、秋の花期がくると開花する。開花した実生菊の花は、種々変つた菊ができるが、仲々両親より立派なものとはできない。多くの実生苗は、交配種として両親と異なつた立派な花を咲かせるものがある。これが実生家が作出した新品種の菊花として、愛菊家に発表せられる。

最近の如く研究が進むにつれて、花粉をとる父木と、結実させる母木の性質等もよく研究せられ、よき実生苗の得られる父木母木なども秘蔵せられて、各実生園から毎年多数の新品種の菊が出品せられた。

昭和の初期には、大阪の槇麓園、国華園、広島市の精興園、名古屋その他の菊花園から、毎年在来にならぬ立派な品種の菊花苗が発売せられた。

愛菊家は毎年美しい新品種を求めて、互に競つたものであつた。中には自分自身で人工受精させて実生による新品種を作出する人もでてきた。実生による新品種は、門外不出として、他に同種の

ものは全くない。

特別の愛好家の中には、菊花園の実生苗の開花の時に、菊花園に足をはこんで花を選定して、自分の好む実生苗を購入し、他人のなき菊花をたのしむ菊花マニアもでてきた。

菊の花は一般には秋開花する。菊は短日性植物で、日照時間、即ち昼間が夜間より短かくなると、蕾つぼみを持ち開花する。

最近最も行われている電照菊は、ビニールハウス内で電灯で日照時間を長くして、菊の開花を遅らせたもので、年末年始にかけて切花店頭に見られている。

又、逆に夏の終りに、日照時間を短くするために黒のビニールなどにて被おおい、日照時間を短縮すれば、早く開花させることも可能になった。

従って、最近は年中何時にても生花用の切花が出荷せられている。生花用の菊花の形、大きさ、色彩等も多種多様なものが作り出されている。

6、大戦後も有楽座とともに

第二次世界大戦の終戦と共に、日本国は一大変革を来し、私共の生活自身が困難を極めました。

川真田市太郎氏（万）の大邸宅も解放して、現在の麻植協同病院となり、菊遊座も菊人形も中止するに至りました。

然し、終戦後日本国民も漸次活気を取りもどし、生活にもゆとりを取りもどしてきました。そして喜来の岡本氏が有楽座を建設して、民衆の娯楽機関として映画演劇等を始められ、鴨島の名物であ

った菊人形を再開せられました。こうして菊人形は戦後も再興せられましたので、愛菊家のあつまりである菊友会の会員連も、菊造りを始め、大菊、懸崖、花壇やら切花等の品評会も再開せられるに至りました。

その後、有楽座による菊人形も、種々の事情により閉館のやむなきに至りました。

然し、鴨島から菊人形をやめるにしのびず、江川遊園地（現吉野川遊園地）に於て存続することになり、菊友会々員の花壇の展示なども遊園地で行っていました。

遊園地に於ける菊人形も、テレビ映画等の大衆娯楽の興隆につれて、一時の隆盛を失いかげ、他方、菊友会員の愛培菊花の展示も、遊園地を離れるに至りました。

現在は松島成三氏により維持せられ、今日まで鴨島にて立菊、懸崖、切花等の展示品評会などが開かれ、鴨島の菊の余命を保っています。

近来日本国も復興し経済大国といわれる程になりました。

徳島県は元より、わが鴨島町も早くより内陸型工業団地を造成し、最近附加価値の高い先端技術関係の工場の誘致に成功し、一、二工場は生産を開始し始めました。

7、鴨島の発展を祈りつつ

思えば半世紀前、私が鴨島に来て以来、鴨島地方は藍作から桑作養蚕に転向し、農家は養蚕に活気を呈し、鴨島の町は製糸業隆盛を極めて最も活気のある町として、県北に君臨していました。然し生糸も人造纖維発達と共に衰退し、わずかに現在の筒井製糸を残すのみとなりました。

然し最近では鴨島工業団地が造成せられ、高い先端技術関係の工場が既に製造を開始することとなりました。他方全国的に計画せられている商業近代化についても、商工会議所を中心に調査研究せられ、二十一世紀に向って美しい夢のような青写真が描かれつつあります。

それと共に文化的方面でも、二十一世紀にふさわしい施設のできることを期待し、心のゆとりを持つ菊作りや菊人形の復活と、往時に負けない興隆を期したいという思いです。

半世紀前、私が参りました鴨島は、「生糸の街」、「菊人形の街」とうたわれましたが、これから二十一世紀にかけて、鴨島は「先端技術の街」、「菊人形の街」となることを期待しつつ私の筆を置きます。

第三節 鴨島の菊づくりの歴史

1、鴨島の菊花展の推移



「菊といえは鴨島」「鴨島といえは菊」と言われていたほど鴨島の菊は町民に親しまれ、また町の内

外に広く名声をあげていた。

ところが、太平洋戦争のため、生活がきびしくなり、「花より団子」の気持ちにおされ、菊づくりも低迷の状況となった。

しかし、「菊の鴨島」の伝統はいまなお一部の愛好者によってしっかり根づいていた。

その上、新しいふるさとづくり運動が展開されるようになり、地域社会の環境の美化と、町民の優しい心情の育成のかけ声によって、鴨島の菊づくりは、復興の一途をたどるようになりつつある。

鴨島の菊づくりは、低迷の時代から、再起復興の波によって発展しているが、これは、鴨島の風土が菊づくりに適しているし、菊づくりに熱心な先輩有志の、精魂こめた努力の賜物であって、その功績はまことに顕著であり、心から敬意と感謝の念をささげたいものである。以下、鴨島の菊づくりの概略の歴史と、先輩の努力のあとをたどってみたい。

大正十年頃、筒井製糸株式会社々長筒井直太郎氏は、会社の寮に寄宿させていた多数の工女さんになぐさみになるように菊の栽培、菊花の展示を思いたれた。

さいわい社長の叔父筒井嘉太郎氏が菊に興味をもち、社員の佐尾山忠作氏が、菊作りに堪能であったので、この二人を主力として優秀な菊をつくりだした。これを展示、品評するとともに、菊づくりの輪をひろげたいと念願された。

これが動機となって、大正十五年には菊友会が結成され、四国菊花品評会が開催されるようになった。昭和十六年秋まで続けられたが、昭和十六年十二月八日、太平洋戦争がはじまったので、菊花品評会は中止となり、菊花栽培も行われなくなった。

昭和二十年八月十五日、大戦争が終り平和をとりもどすと、昔なつかしい菊の復活気運が芽ばえてきた。

昭和二十四年、喜来の岡本勝次郎氏は菊友会を結成して、四国菊花品評会を再開された。盛会を続けていたが、昭和四十年には経営難になり、十七年間で中止のやむなきに至った。

昭和四十一年、筒井康二氏は岡本勝次郎氏の後をうけて菊友会長となり、会場を江川遊園地に移し、毎年四国菊花品評会を盛大に開催されている。

ところが、鴨島で生まれた菊の会を、鴨島の地で開き、鴨島の発展に役立てたいと念願する空氣が強くなった。

昭和四十九年、鴨島町長を会長とする鴨島町菊花愛好会が結成され、鴨島駅北、筒井製糸株式会社南前、阿波銀行南前で開いていたが、昭和五十五年から鴨島公園内で開催されるようになった。鴨島まつの一環として菊花展示が定着し、毎年開催されている。

2、華やかだった頃（大正十二年～昭和十五年）

大正十二年、筒井製糸株式会社々長筒井直太郎氏は、叔父筒井嘉太郎氏や佐尾山忠作氏等の育てた菊を、工場南前の広場で展示し、会社の人や町の人に見せて喜ばれ、鴨島の菊の第一歩を踏みだした。

大正十三年には、前年に勝る見事な菊百鉢を展示して人々を喜ばし、菊栽培に熱がもりあがった。

大正十五年、筒井嘉太郎氏は、鴨島のイベントづくりに鴨島町内外よりの同好者四十人で鴨島菊友会を結成し、菊の栽培をひろげるとともに、第一回菊花品評会を開催した。品評会はその後も毎年続けて開かれるようになった。

昭和三年、今上天皇ご即位の年である。この年、菊友会は鴨島菊遊会と改称し、本郷の広場に菊遊座



菊遊座の菊

を備えた会場を開設した。

この場所は、今の麻植協同病院の東側より、今の鴨島町役場の西側までの間で、その当時は広い畑になっていた。ここは鴨島駅から直通しているし、近くに阿波観光バスの停留所もあって、観覧者を集めるには恰好の場所であった。この年の秋、ここで四国菊花大品評会や見流し菊人形の展示、菊人形五段返しが開かれると宣伝されると、この当時、枚方の菊人形も行われていなかった時のことだったから、観客は阪神方面からおしよせた。

板野郡阿波郡を運行していた阿波縦貫バスも、会場へ乗り入れるようになった。この頃は自家用車は殆んどなく、観客は歩いたので、商店街から会場まで人が続き、会場までの通りは菊見通りといわれるようになった。

出品菊は、立菊花壇、千輪花壇、懸崖花壇、綜合花壇、盆養花壇で、優勝者には優勝旗が渡された。見流し菊人形は、五条大橋の牛若丸と弁慶、養老の滝、曾我兄弟の討入、楠公父子の別れ、乃木將軍とステッセルの会見などが展示された。菊花を使った五段返しや十段返しも上演され、特に興味をよんだとのことである。

なお昭和三年には、最も優秀な菊を天皇へ献上し、鴨島の菊の名が天朝に達した。当時天皇は、神格視されていた時代なので、菊花献上は鴨島の誇りでもあった。

昭和五年には、鴨島菊遊会員は六十人となり、第六回四国菊花大品評会を見流し人形の展示や、段返し劇と共に盛大に開いた。この当時、会長は元町長の武智加之吉氏で、計画部長は筒井嘉太郎氏、宣

伝部長は齒科医の和田千賀一氏、栽培部長は佐尾山忠作氏であった。

菊人形や段返しの宣伝が広くわたっていたので、県内外より多数の観客がおしよせ、入場者の多い日には一万人を数えたといわれている。

出品菊は立菊花壇で、当時の審査員は神戸の鈴木長吉氏、黒沢俊弥氏であった。

いまま記憶に残っているものを列記すると、見流し菊人形は、いざり勝五郎仇討の場、山内一豊の妻宮島風景美人手踊りの場、少年時代の乃木將軍、大高源吾と宝井其角、安宅の松の場、八百屋お七の見の場、戸隠山紅葉狩の場、白石話し新吉原の場である。

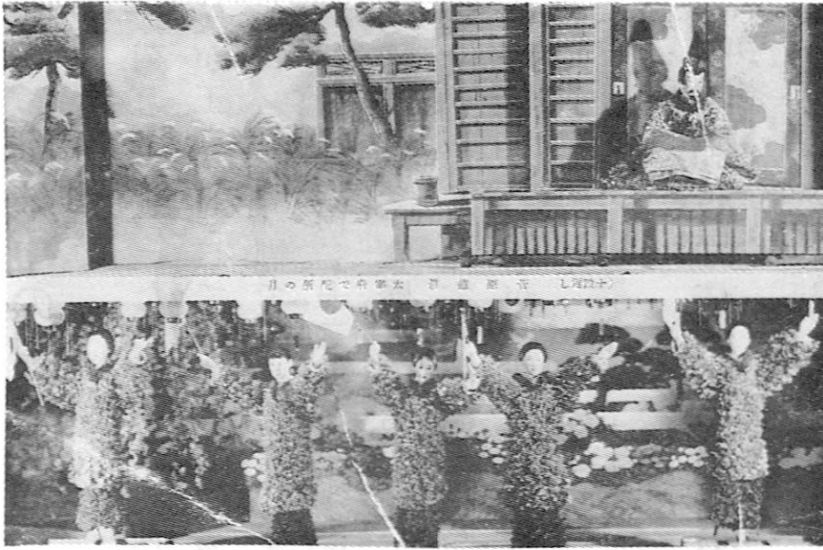
三段返しでは、加々見山奥庭尾上が忠僕お初仇討の場、鎌倉三代記三浦之助時姫別れの場、忠臣蔵九段目山科の段が、電気廻転で上演された。

上段返しでは、大極殿舞樂胡蝶の舞化の場、源平合戦屋島の浦平知盛入水の場、明鳥浦里雪責の場、金色夜叉海岸月の場が上演された。

十段返しには、菅原道真配所の月、亜細亞の黎明、盲目二人伝令、銃後の守り、地球に朝が来る。軍馬戦場美談が上演され、人形師は名古屋から薫花園の野々山氏が、背景師は京都から新居万次郎氏がこられて当った。

また、南京空襲でハンカチを振りながら散華した、徳島市の梅林大尉の遺影を、筒井直太郎氏や戸田禎三郎氏の希望で、青年時代の松島成三氏が苦心して借り、会場に安置して、盡忠報国の大和魂を喚起したこともあった。

その後の見流し菊人形では、武漢三鎮攻略パノラマ、上海事変四十三連隊敵前上陸の場など。また、十段返しでは、海南島敵前上陸、南京城中華門外の大奮戦、海の荒鷺体当りの場、大場鎮攻略人柱などが展示された。



菊遊座の菊

出品菊の優勝者には、鴨島菊遊会菊花奨励会長から、優勝旗が贈られた。

昭和五年の四国菊花大品評会は最も盛大であつて、昭和六年には満州事変、昭和七年には上海事変、昭和十二年には蘆溝橋事件。昭和十六年には太平洋戦争になつたので、菊人形や段返しも軍事色豊かなものとなり、品評会もおとろえをみせた。

菊の出品者は、さだかではないが、当時活躍されていた人の中に、和田千賀一齒科医、健在の藤川良雄氏、大池金太氏、戸井利一氏、喜島政吉氏、大西吉三郎氏、佐尾山忠作氏、川島の中村久子氏の名が

残っている。

菊遊会の菊花品評会は、この後も毎年十月二十日から十一月十五日まで続けられたが、会場広場は菊の時期以外には色々な催しが行われ、大相撲の横綱常ノ花、関脇玉錦、大男の出羽ヶ嶽など一行の興行も行われた。

昭和十六年、太平洋戦争がはじまつた年には、鴨島の渡辺氏や川真田貞助氏、松本貞雄氏等が、菊遊座で火事劇場を上演して、防火精神を喚起したこともあつた。

昭和十六年からは、菊遊会の菊花品評会は中止となつた。

菊遊会の活動が、鴨島商店街に与えた利益は大きく、菊遊会を育てた筒井直太郎氏や、活動の第一線に立った筒井嘉太郎氏、菊づくりの佐尾山忠作氏の功績は、忘れることはできない。

3、戦時中の菊遊座

菊遊座のあった土地には、戦時中、軍管理のもとに、上下島の武智実五郎氏が社長、飯尾の深見定一氏が工場長として、航空化工場を設立し、風船爆弾の部品として川田で生産した和紙を、山分で生産したコンニャク糊で張り合わせる作業をしていた。

戦後は昭和二十二年、武智魯平氏が木工工場を経営していたが、続かなかった。昭和二十五年からは、切幡の森氏が農機具工場を開いて、農具を製作していたが、長く続かなかった。

その後は、住宅や店舗がたちならび、面目を一新している。そして現在は、鴨島町役場の西側にある野神祠や庚申塔が、菊遊会広場の東部の位置を示している。

4、鴨島の菊の復活(昭和二十四年～昭和四十一年)

太平洋戦争中、鴨島の菊花品評会は中止となり、菊鉢は全て伏せられていた。

昭和二十三年、新制の鴨島中学校が創設された。その当時は、終戦後の人心混乱時で、生徒の気風も荒れていて、町外より鴨島へくる子どもを、生徒がいじめたり、おどしたりしたそうである。中学校では、生徒の気風を和らげるため菊花の感じを配した帽章を定めた。昭和二十四年四月から、生徒に一人一鉢の菊を栽培させ、菊花を愛する優雅な情操を養いたいと願った。

その当時は、菊遊会時代に使った菊の鉢は、全部えんの下に伏せていたので、学校ではこれを寄付してもらい、京都より菊苗を取り寄せて栽培をはじめた。菊栽培の指導者には佐尾山忠作氏を委嘱し、学

校では翌年菊苗をふやして、町内の希望者に配布した。鴨島菊の復活にも役立てたいとの希望をもって
いた。

鴨島の菊を復興したいと念願していた人はほかにもいた。

喜来の岡本勝次郎氏は昭和二十一年、鴨島菊の復興を目ざして、佐尾山忠作氏の協力で菊の栽培をは
じめた。そして三年の間に、優秀な菊もふえてきた。町民も岡本氏の運動に同調し、菊を栽培する人が
ふえて、菊花品評会開催の機も熟してきた。

昭和二十四年、岡本氏は同氏の所有する喜来の畑一五〇〇坪に、菊の会場を開き有楽座をも建設した。
同年秋には同志二十数人と菊友会を組織し、氏は会長に選ばれた。

菊友会が四国菊花品評会を開くと、出品菊は一万鉢にも及んだ。

見流し菊人形も菊人形師の鳥居慶明氏を招いて、見事なものを多数展示した。この時の品評会や見流
し菊人形は、九年ぶりのことであった。娯楽の少ない時代であったので、観客は県内外よりも殺到し、
鴨島駅前には数人の入場券の売り子が出るほどで大盛況であった。この観客は鴨島の商店街にもあふれ
町は本当ににぎわった。

昭和三十二年の四国菊花品評会では、立菊花壇、綜合花壇、懸崖花壇、盆景、芸術花壇、切花競花の
見事なものが出品された。菊の女王選賞や県下中高等学校出品の菊花コンクールも行われた。菊花の見流
し人形が一場面展示され、菊花を使った十五段返しも行われた。出品菊の審査は、農林省振興局、中村
銀治氏、明石市、立石恒四郎氏、香川農科大学、小杉清氏、明石市、岩井武治氏、徳島県園芸特産課、
吉田孝雄氏、鴨島菊友会、佐尾山忠作氏によって行われた。

菊花を使った忠臣蔵の十五段返しを上演した時は、衣川晴子の浄瑠璃調の説明がついて観客をわか
せた。

この年の来観者は特に多く、鉄道側では臨時列車を続発して客を運んだほどで、会場は人で溢れた。
香川県の大川バスが、たびたび讃岐の客を運びこんでいた。

有楽座では、菊の時期以外は娯楽の催しをしたが、大友柳太郎、長谷川一夫、島田正吾、辰見柳太郎、古川ロッパ等の名優が劇を上演して、人々を楽しませてくれた。

昭和三十五年二月、有楽座は火災で焼失した。それでも直ちに復興され、前よりも会場を拡張して、菊花品評会や見流し菊人形、段返しが行われたが、しかし、年とともに経費多端のため昭和四十年まで続けられた菊友会は、ついに休止のやむなきに至った。

菊友会での四国菊花品評会で、優秀者として明確な人は次の通りである。

○懸崖花壇

第八回 昭和三十三年 佐藤正楽園 (和田島)

第九回 昭和三十四年 大西喜楽園

第十回 昭和三十五年 石本秀一 (山川町)

第十一回 昭和三十六年 阿部良雄 (石井町)

第十二回 昭和三十七年 大塚春幸

第十三回 昭和三十八年 岸田貢

第十四回 昭和三十九年 岸田貢

第十五回 昭和四十年 岡本勝二郎 (吉野町)

第十一回 昭和三十六年 梶田薬局 (吉野町)

第十二回 昭和三十七年 石本秀一 (立江)

第十三回 昭和三十七年 岩本文七 (立江)

第十四回 昭和三十九年 岸田貢

○総合花壇



優勝者を祝ってかけつけた人々

このほか、大塚雪雄、鶴熊安雄、谷川重雄、志摩百三郎、大西義典、吉田春雄、岡田利明、鎌田義幸の諸氏も優秀な菊を出品された。

岡本勝二郎氏は、菊友会長として十七年の間、菊花品評会を開催し、県内外に鴨島の菊を紹介するとともに、多くの人を鴨島に集めて商店街を潤わせてくれた。汽車やバスの交通機関に与えた利益も多大である。菊づくりに貢献した佐尾山忠作氏の蔭の功績も忘れることはできない。

5、菊遊会は江川遊園地で(昭和四十一年)

昭和四十一年、筒井製糸株式会社社長であり、商工会議所会頭である筒井康二氏は、鴨島菊友会長となり、四国菊花品評会々場を江川遊園地に求めて会員六十名で開催を続けている。

江川遊園地は、昭和六年工藤禎三氏が、慰安行楽地として経営をはじめたが、昭和四十四年より徳島興発株式会社が経営するようになった。

江川遊園地における四国菊花品評会では、立菊花壇、綜合花壇、盆養花壇、千輪花壇、懸崖花壇などが出品され、昭和四十一年から昭和四十三年までは、見流し菊人形も展示された。審査は明石市、岩井武次氏、香川農科大学、小杉清氏、徳島県園芸特産課、吉田孝雄氏、鴨島菊友会、佐尾山忠作氏によって行われている。

昭和四十三年よりの優勝者は、左記の人々で、優勝者には優勝旗と農林大臣賞が授与されている。昭和五十三年から農林水産大臣賞は次のとおり。

昭和四十三年	立菊花壇	大塚春幸
昭和四十四年	千輪花壇	大塚春幸
昭和四十五年	綜合花壇	篠原嘉久太
昭和四十六年	立菊花壇	大塚雪雄
昭和四十七年	綜合花壇	高砂始
昭和四十八年	立菊花壇	大塚春幸
昭和四十九年	綜合花壇	岸田貢
昭和五十年	立菊花壇	大塚雪雄
昭和五十一年	綜合花壇	四宮忠平
昭和五十二年	綜合花壇	仁木島仁幸
昭和五十三年	綜合花壇	鎌田義幸
昭和五十四年	綜合花壇	岸田貢
昭和五十五年	綜合花壇	鎌田義幸
昭和五十六年	綜合花壇	大塚春幸
昭和五十七年	綜合花壇	大塚春幸
昭和五十八年	立菊花壇	鶴熊安雄
昭和五十九年	立菊花壇	岡田貞信

江川遊園地における鴨島菊友会の四国菊花品評会は、毎年十月二十日から十一月十五日までの間に行われている。しかし、鴨島より会場が離れ「菊の鴨島」のイメージは弱まっていった。



東京オリンピックにあわせた菊花

6、鴨島町菊花愛好会結成(昭和四十九年)

昭和四十八年頃、徳島県より花いっぱい運動のよびかけがあった。これに共鳴して町内の菊花愛好者は、中心の鴨島でも菊花の展示、品評会を開きたいと熱望がわき、鴨島商工会議所会頭の筒井康二氏、鴨島観光協会会長松島成三氏、ミマ百貨店主美馬重幸氏、筒井洋品店主筒井正雄氏の世話で会結成の気運に向かった。

昭和四十九年四月二十五日、鴨島町長を会長とする鴨島菊花愛好会が結成されて、菊づくりの研究、会員の親睦、町内へ菊の普及、明るく豊かな町づくりを目的として、具体的に推進することになった。会員は、鴨島菊友会員を主とする六十名の会ができた。

昭和四十九年と五十年には、鴨島駅前前の空地に、昭和五十一年と五十二年には、筒井製糸前の空地に、昭和五十三年と五十四年には国道筋の阿波銀行南向きの空地で開かれた。

昭和五十五年の秋には、鴨島公園内の一角、中央橋通り側で開かれ、その後も毎年この場所で続けられている。

出品菊は総合花壇、懸崖花壇、盆養花壇、立菊花壇、ミニ三本立、福助、競技花で、四十年の菊歴をもつ鴨島の菊として、優秀なものが展示、品評された。

出品菊の審査は、徳島農業大学の吉田孝雄先生によって行われている。

総合して最優秀な菊の出品者には、優勝旗と文部大臣賞が授与された。

○優勝旗を受けた人

昭和五十年	総合花壇	四宮忠平
昭和五十一年	立菊花壇	大塚春幸

昭和五十二年	立菊花壇	岡田貞信
昭和五十三年	立菊花壇	仁木島信幸
昭和五十四年	立菊花壇	仁木島信幸
昭和五十五年	懸崖花壇	佐尾山義一
昭和五十六年	懸崖花壇	佐尾山義一
昭和五十七年	立菊花壇	鈴田和夫
昭和五十八年	立菊花壇	鈴田和夫
昭和五十九年	綜合花壇	大塚春幸

昭和五十九年鴨島町菊花愛好会品評会において、各花壇別最優秀賞を受けた人

綜合花壇	文部大臣賞	大塚春幸
懸崖花壇	総務長官賞	山口武雄
盆養花壇	大日本水産会長賞	有持清治
立菊花壇	県知事賞	岡田貞信
ミニ三本立	鴨島町長賞	佐尾山ツルエ
福助	町議会議長賞	鈴田和夫
競技花	町教育長賞	鈴田和夫

鴨島町菊花愛好会では、町内に菊の栽培を普及するため、次の人を指導者にも選んでいる。

鴨島 篠原嘉之太、鈴田和夫、馬越正三



関西菊花展の優勝旗



岸田貢氏の菊



喜来	岸田	貢
森山	鎌田	義幸、四宮忠平、大塚春幸
牛島	岡田	貞信、有持清治
敷地	仁木島	信幸、新居一二
知恵島	谷沢	秀夫

鴨島町菊花愛存会では、昭和五十九年より鴨島駅前曾我廼家五九郎像の建てられている花園に、菊鉢

鉢を展示して通行人に見せ、鴨島の菊を誇示している。

会では、この年から鉢植菊の貸し出しをも行って、街頭を菊で飾る事業もはじめている。

7、鴨島駅前に菊人形展示はじまる

(昭和五十二年)

鴨島の菊人形は、昭和三年より昭和十六年まで本郷の菊遊座で展示され、その名は県外にまで知られたが、昭和十六年の大戦突入によって中止となった。

戦後、昭和二十四年から昭和四十年まで、喜来の有楽座で菊花品評会とともに盛大に行われていたが、経営難によって、また中



宮本武蔵・佐々木小次郎決斗の場

止となった。昭和四十一年、菊友会が江川遊園地に移り、菊花品評会とともに菊人形も展示されていたが、昭和四十三年まで続き、その後は菊人形の姿が消え、菊の時期になると、町民は菊人形に郷愁がわくのであった。

こんな時、鴨島の民芸愛好家で鴨島観光協会の松島成三氏は、菊人形の復活を念願された。昭和五十二年、松島氏は同協会の西谷氏を宇部市の常盤公園に派遣して、菊人形の材料に適した菊苗を取りよせ、松島氏の所有畑に菊を栽培された。

同年秋には菊人形の展示場所を鴨島駅前、国鉄駐車場の一部を求め、人形師として安城市磯村蔵喜氏、碧南市鳥井慶昭氏を招き背景を鴨島の真野氏に委嘱し、材料の菊は松島氏栽培のものをあて、その当時、テレビで興味の高かった鳴門秘帖剣山洞窟の場を展示された。

人々は見事な菊人形のできばえに感嘆し、菊人形の復活に多大の感動を受けた。

駅前の菊人形はその後毎年行われ、演題は芝居やテレビで人々に親しまれているものが選ばれた。

展示された菊人形は次の通りだった。

- | | |
|--------|-------------|
| 昭和五十二年 | 鳴門秘帖剣山洞窟の場 |
| 昭和五十三年 | 忠臣蔵大石良雄討入の場 |
| 昭和五十四年 | 水戸黄門米俵腰掛けの場 |
| 昭和五十五年 | 銭形平次銭投げの場 |



昭和五十六年 本能寺の変森蘭丸奮斗の場
 昭和五十七年 忠臣蔵南部坂雪の別れの場
 昭和五十八年 大岡越前裁判の場
 昭和五十九年 宮本武蔵佐々木小次郎決斗の場

この菊人形は、見る人に多大の興味と感動を与えて楽しませてくれるが、人形展示に至るまでに、松島氏が人形用菊を自家栽培したり、資金繰りに大きな努力をしていられることに感謝しなければならぬ。この菊人形が今後も続けられるよう祈りたい。

8、菊づくりの苦勞

菊の出品者は、菊花を愛好して栽培することはもとより、最優秀菊の作出に真剣な努力を注ぎ、年一度の出品に年中、菊の管理に専念するのである。

菊の栽培は土作りからはじまり、肥培、灌水、除虫、枝作りなどの手間がかかる。

品評会出品の菊は、審査の十日前からは入れ替えを許されないで、審査時に咲きそろようよう配慮されなければならない。出品中にも絶えず手入れをしなければならぬ。

出品菊が優勝すると、優勝旗を掲げて凱旋するが、近隣の人や同志も笹竹に赤や白の布をつけた幟を



おし立てて出迎え、家では祝宴を開いて喜び合うのである。家では優勝旗や賞状賞品を飾り、翌年への意欲を燃やすのである。

観客は菊を見て楽しむが、その裏には、出品者の菊愛好に対する尋常ならぬ熱意、菊栽培への研究、絶えない管理、展示の工夫があることを推測するのも、興味深いことであるまいか。

本節協力者

筒井 磯枝	渡辺 新一	鎌田 義幸	美馬 重幸
藤川 良雄	森 新治	岸田 貢	松島 成三
和田 芳	深見 定一	大塚 春幸	西谷 文彰
松浦 文雄	岡本 有	岡田 貞雄	仁木島 信幸
松本 貞雄	日野 総一	筒井 正雄	

文責 日野 喜久雄